
日米の情報戦に関するひとつの事例研究

— 太平洋戦争におけるマリアナ沖海戦

三宅 光一

要旨

本論文は、太平洋戦争下の情報戦の一環としてマリアナ沖海戦を取り上げ、情報がいかに大切であったかを究明するものである。サイパン攻略の前触れとして米機動部隊がマリアナ諸島を空襲したが、日本側指導部はパラオ海域での空母決戦を策定しており、ビアク島の米軍上陸を知ると、陽動作戦に引っかかった。そのためになかなか戦略発想の転換が出来なかった。猛烈な3日間の空襲後、サイパン上陸が実施されてから、ようやく「あ号作戦計画」の決戦発動となる。こうして敵情判断を誤ったために、小沢艦隊と基地航空部隊との共同作戦は当初から破綻をきたした。

米海軍は入手した「福留の機密文書」の内容を分析して、出動してきた小沢艦隊の作戦企図を読み取っていた。先制発見と先制攻撃は、空母対決における勝利の必須条件である。先制発見の点では小沢長官に軍配が上がった。けれども先制攻撃を取り止めて、翌日の全力攻撃に勝負をかけることに決したことは賢明な判断とはいえなかった。優秀なレーダーによって、翌日の日本攻撃隊はあらかじめ探知され、待ち構えた数多くの米グラマン機に迎撃された。VT信管を使用した米軍からの応射は、米艦への攻撃を著しく困難にした。日本の搭乗員の未熟さもあり、あらかじめ日本機の攻撃は排除され、指揮官スプルーアンスは味方輸送船団への脅威がなくなったので、19日夕刻からは米機動部隊の反転攻勢を始めた。翌日の追撃戦のうちに小沢艦隊は惨敗して、本土に帰投した。

米側の勝利に大きく貢献したのは、あらかじめ「福留の機密文書」を熟知して、大局の展開においてゆとりをもって事に対処できたことである。各方面で必死に情報の獲得に尽力した米国に対して、日本の姿勢は直接戦闘にばかり腐心する傾向が強く、情報は大切だと思いつつも、真剣な取り組みに欠けていた。マリアナ沖海戦でも、その欠陥が露呈した感がある。

キーワード：福留の機密文書、あ号作戦計画、アウト・レンジ戦法、マリアナの七面鳥狩り、情報軽視

はじめに

本論文は、太平洋戦争に関して情報戦といった観点から考察を加えようとする意図をもって解明を試みたものである。といっても、日米間の激闘が4年半の長期にわたって、しかも広大な地域で繰り広げられたので、緒戦から終戦に至るまでの全貌把握は、小論ではどうも無理な話である。

そこで日本海軍の最大の弱点となった情報漏洩の問題に、ある程度まで論点を絞り、いわゆる「海軍甲事件」と「海軍乙事件」に焦点化して、究明することとした。従来、この研究方向に即していくつかの拙論を著述してきた。すなわち『『海軍甲事件』—太平洋戦争下における情報戦』がそれであり、また「日米の情報戦—『海軍乙事件』その他」は連続4編を重ねてきた¹⁾。今回の拙論も、これら5編の論文を継続する性格を持っている。このような具合に歴史的な事件は事の本質上、おのずから諸要因との連鎖において時間的な広がりを持ち、嵩張った内容とならざるを得ないのである。

「海軍甲事件」は、通信傍受によって暗号を解読されたことが、連合艦隊司令長官・山本五十六大将の戦死に直結していったのである。他方、「海軍乙事件」で明らかとなったのは、連合艦隊司令部の参謀長・福留繁中将の一行が捕虜になり、所持していた最高機密図書（以下で「福留の機密文書」と呼ぶ）をフィリピンゲリラに奪取され、米国側にそれが渡ったことである。「海軍乙事件」の情報漏洩では一体、これほどまでに世にも不思議なことが起こり得るのか、といった偶発性に由因していた²⁾。この来たる内南洋における一大海戦の作戦計画書は、大本営や連合艦隊司令部の「奥の院」のような場所で秘匿されてしかるべき代物である。この機密内容は、日本海軍でも若干の高級参謀及び連合艦隊の指導層に閲覧が許されただけである。それなのに、それがそっくりそのまま戦時下の敵手に渡ったのである。この事態の由々しさ、深刻さは、何と表現すればよいのだろうか。それに加えて、軍令部では機密漏洩の可能性が詳しく審議されず、放置された。そのことが数か月後に起きた「マリアナ沖海戦」に多大な影響を及ぼさないわけがない。戦前に長年にわたって海軍が研究してきた「此の一戦」は、日本海軍の惨敗に終わった。その敗因には、複合的に絡み合ったさまざまなものが考えられよう。しかし、手の内を完璧に曝け出してしまった情報漏洩に、根本的な要因を求めても、決して誇張することにはならない。

戦場とは、互いに誤解と錯誤、また正鵠を射た判断、失敗と成功、不運・幸運の入り混じった出来事の連続だ、このような言い方はしばしば経験者から耳にする言葉である。本論文では、マリアナ沖海戦で繰り広げられた情報の活かし方如何が勝敗に作用したことを指摘し、また敗因のひとつはこの「福留の機密文書」による情報漏洩にあったことを論ずるつもりである。論の展開の仕方に関して言えば、まずはマリアナ沖海戦の実態を時系列的に確認する、それを踏まえて日本海軍の情報に対する対応状況、さらに「福留の機密文書」との関連を見ていくことになる。

1. 米軍攻略部隊の出動

昭和19年6月6日、米軍のマリアナ諸島攻略部隊はメジュロ環礁を出撃して、北西方向に進撃した。戦闘艦艇と補助艦艇とを合わせると、その数は実に535隻、兵員輸送は12万7千名余りで、そのうち敵前上陸の専門部隊である海兵隊は2/3を占めた。第五艦隊の総指揮官スプルーアンス中将は重巡「インディアナポリス」に座乗して、真珠湾からマーシャル群島へと出航した。マーシャル諸島のメジュロ、クエゼリン、エニウエトク（別名ブラウン島）の各環礁には、すでに第五艦隊が集結していた。スプルーアンス提督は、6月9日にエニウエトク環礁を発ち、翌日にはミッチャー少将指揮下の第五八機動部隊と合流した。その後、日本側の連合艦隊の関心が「渾作戦」に惹きつけられている隙を衝いて、一路サイパン島に向かった。その大船団には、欧州戦線における6月6

日のDデー、ノルマンディー上陸作戦の成功が伝えられ、いやが上にも士気が高まった。

サイパンは、最も近い前線基地のエニウエトクからでも千マイル以上の彼方にある。6月11日の午後、469機の艦載機でサイパン、グアム、テナンを襲撃した。今までの米海軍による襲撃の定石では、早朝狙いを常としたが、ミッチャー提督の提案で、今回は午後の空襲に切り替えることで奇襲攻撃を企図した。ずばりその策が当たり、日本側にとっては完全に裏をかかれた格好となった。「トラック大空襲」「パラオ空襲」「マリアナ空襲」、いずれをとっても思いがけない奇襲の効果を生じた³⁾。その原因には、それぞれ異なる諸事情が見出せるであろうが、一点、共通するところは、適確な情報が日本側に欠けたことである。つまり米軍と違い、優秀なレーダーが装備されていなかったか、全然備わっていなかったことである。それに最前線の後方であって、兵站基地の平和な気分が抜けなかったことである。気づいた時には、敵が身じかに迫っているという有様だった。マリアナ諸島の猛烈な空襲は翌日も続き、日暮れまで米機動部隊の編隊が入れ替わり立ち代り、日本軍の飛行場や軍事施設、陣地に対して適確な攻撃を加えてきた。日本の軍用機124機を撃破し、マリアナ諸島各地に展開した基地航空隊に壊滅的な打撃を与えた。またサイパンから逃走中の第4611輸送船団（駆逐艦「鴻」の他、護衛艦9隻、輸送船12隻からなる船団）のうち、輸送船2隻が撃沈され、その他の船舶も損害を被った。

2. 連合艦隊の立ち上がりの遅れ

マリアナ諸島の空襲を受けて、豊田連合艦隊司令長官は、瀬戸内海の旗艦「大淀」から「あ号作戦決戦用意」を発令した。だが、これは米軍による一過性の空襲なのか、それとも本格的な上陸作戦の前触れなのか、判断がつかないなかでの暫定的な対応であった。サイパンの空襲開始から3日経ち、連合艦隊司令部の要請があっても、大本営軍令部は一両日様子を見ようとした。爾後の戦闘経過を俯瞰すれば、明らかにこれは対応の遅れを意味したといつてよい。大本営の軍令部作戦課はパラオ海域での空母決戦を想定しており、5月3日発令の「あ号作戦計画」（機密連合艦隊命令作第七五号）も、パラオ方面を第一候補に策定していた。サイパンへの敵空母機の空襲を知らされても、なかなか戦略発想の転換ができず、希望的観測を持ち続けた。6月13日 [17:27] に「決戦準備」の発令を受けた時、小沢第一機動艦隊はボルネオ島北東部のタウイタウイ泊地を出港して、フィリピン中部のギラマス島に回航する途上にあった。

「タウイタウイに在った小沢長官は、そこが訓練地として不適当なため、適当な泊地を物色した。

そして、北方のラル海にギラマス港のあることを発見し、十三日の午前九時、タウイタウイを出港して移動を始めた⁴⁾」。

不断の訓練は、とりわけ飛行機乗りには欠かせない日課である。技量の優れたベテラン搭乗員ですら、1週間も飛行していなければ、編隊飛行の精度を欠いたりする。まして練度の低い搭乗員は常時訓練に明け暮れていなければ、基礎課程を終了した腕前すら落ちてしまう。小沢機動部隊は、未熟な搭乗員が多数を占めていた。リング泊の訓練は、空中接触、母艦着陸の失敗、その挙句、海面への激突などの事故が頻発した。3航戦の653空は入隊後の搭乗員の訓練期間が3か月、また2航戦の652空は2か月、1航戦の601空は約5か月であった。601空には、ラバウルの生

き残りなどベテランが配属されたが、それを除く大半は訓練不足であった。あと最低3か月の訓練は続けるべきだったが、逼迫する情勢はそれを許さなかった。

タウイタウイ泊地では、母艦の飛行関係者から小沢長官は、飛行訓練の必要性について再々要望が寄せられていた。結局、その付近には陸上の飛行機基地もなく、泊地内も手狭で飛行機隊の母艦発着訓練はできそうにもない。そうかと言って泊地外に空母を出してセレベス海で訓練をしようにも、そこでは多くの敵潜水艦が網を張って待ち構えていた。実際、泊地近くで駆逐艦「雷」「水無月」「早波」「風雲」「谷風」また油槽船「建川丸」が雷撃を受けて沈没した。駆逐艦は潜水艦の天敵であるはずが、この時期の日米間では、関係が逆転していた。性能の良いレーダーを利用して、米潜は有利な立場に立っていた。発着艦訓練に泊地外に出た空母「千歳」も魚雷2本が当たったが、幸いにも不発だった。「千歳」は訓練の途中で早々に中止し、泊地に引き返した。米潜水艦のせいでタウイタウイでは1か月もの間、缶詰状態で飛行訓練ができなかった。米潜水艦の跳梁によって訓練が困難になるとは予想もしていなかった⁹⁾。ギラマス島であれば、中部フィリピンのパナイ島とネグロス島との中間に位置し、潜水艦の脅威もなく、近くには陸軍の航空基地群があった。それらを利用して訓練に励もうとした。ギラマス島の泊地でも、実際にはほとんど航空基地を利用できない状況にあった。こうした状況の悪さが後遺症となって、機動部隊の行く末に暗い影を落とすこととなる。

6月13日、リー提督麾下の新鋭戦艦7隻が、ミッチャーの第五八機動部隊から分派して、サイパン島に向けて艦砲射撃を開始した。だが、沿岸の艦砲射撃が不慣れたために、失敗に終わった。翌14日になると、今度は旧式戦艦群がサイパンとテニアン沖に姿を現して、有効な陸上砲撃を繰り返した。これらの戦艦群は緒戦において真珠湾が日本軍機の奇襲を受けた時に、沈められたものである。後に軍港の浅い海底から引き揚げられた。艦隊決戦から空母対決へと海戦の様相が変わり、こうした旧式の低速戦艦の使い道に苦慮していたところ、ガ島争奪戦で日本の主力艦による米軍航空基地への砲撃が絶大な戦果を挙げた。その成功例に倣って、以後の戦闘で米海軍は、旧式戦艦を島嶼の艦砲射撃作戦に専用した。新鋭戦艦の場合は、高速空母を中核とする輪型陣形の一角に据えるといった用兵転換を図った。激烈な空襲と3万発に及ぶ陸上砲撃によって、サイパンの西海岸にあるチャランカノアとススペ海岸の水際拠点は完全に潰された。もともと、その防備たるや、お粗末の一語に尽きる。機械化されていない日本の施設隊はモッコを担ぎ、ほとんどツルハシとスコップだけで苦勞しながら、珊瑚礁の岩盤に挑んでいく。満足にトーチカを作れなかった。米軍の上陸時には、散兵壕ですら、腰を屈めて身を伏せても、上半身が隠れない程度のものであった。

内南洋の北辺に当たるサイパンは、米軍占領下のマーシャル諸島からはるか遠方の地にある。それ故、大本営としては、米軍の侵攻は8月過ぎだろうと想定していた。そしてその頃を目途に、陣地構築を仕上げて、全島を要塞化する計画であった。大本営は、このように急速な侵攻を予想できなかった。また同時に、想像を絶するような米軍の猛爆撃を相も変わらず想像できていなかった。そのためには、参謀格の現状分析、情報斥候や兵卒レベルなどから見える戦場の光景と情報の多様性への考慮などが必要である。だが、玉砕に次ぐ玉砕で、情報を得られる戦闘経験者があまりに少なかった。これでは戦訓を汲み取ることは出来ない。半年後のフィリピン戦線ようやく敵艦砲射

撃の威力、米軍との戦闘法の教則本が出来上がったというのである。いかに情報が貧弱だったことか、まるで暗夜に自分の習熟した戦法を無意味に繰り返すだけであった。上層部の対応は、情報軽視もはなはだしい⁶⁾。

ニミッツ太平洋艦隊司令長官は、トラック島やパラオ諸島の空襲で日本軍の脆弱さを見抜き、検討の結果、侵攻スピードを速めて、一段と攻勢をかけてきたのだった。それでサイパン島全体の防御はいまだ完成していなかった⁷⁾。防御施設の構築や補強のための軍需物資を満載した輸送船は、その多くが米潜水艦に沈められた。かろうじて無事だった船舶から降ろされた資材や大砲、弾薬、糧食なども、港に野積みされていたところを、米艦載機によって破壊されていった。程なく砲爆撃の援護を受けながら、米軍のフログマンなど水中爆破隊が掃海作業に従事し、礁湖（ラグーン）の水路を海図に記入していった。島の周囲や礁湖のどこにも、機雷敷設やその他の障害物構築が施されていない。礁湖には、砲撃の射程設定に際して標的の目印となる旗が立っただけである。米軍は上陸作戦の前路啓開を行った。6月15日の午前〔04：40〕からは、艦砲射撃が再開されて、150両の水陸両用車ならびに100隻以上の上陸用舟艇が西海岸に殺到してきた。その日のうちに米海兵隊は、猛烈な反撃を受けながらも、海岸の水際に橋頭堡を確保した。

15日に敵の攻略部隊がサイパン沖に出現し、上陸作戦が現実となった段階で、ようやく大本営海軍部は、連合艦隊司令部に対して「あ号作戦」決戦発動を下令した。上陸開始が〔07：15〕なので、決戦発動はその2分後のことであった。あわよくば上陸阻止を望んでいたが、それは実現不可能となった。敵情判断を誤ったというべきであろう。

3. 小沢艦隊出撃と米軍の監視行動

小沢中将の指揮する第一機動艦隊は、正式の大型空母3隻、改造型の軽空母6隻、戦艦5隻、重巡11隻、軽巡2隻、駆逐艦38隻を擁する編成であった。その頃、小沢艦隊はギラマス島に入泊中で、前日の〔17：00〕から翌15日の〔07：00〕まで全艦隊が補給に専念していた。強風のなか行われ、補給量は全部で1万8千トンに達した⁸⁾。〔07：17〕決戦発動が報じられると、ただちに全艦出動を開始し、夕刻にはサンバルナルジノ海峡を通過して、マリアナ海域を目指した。決戦場に到着するまでに、4日の日数を要する。将兵たちは、今度こそはミッドウェー海戦の仇を討つとの意気に燃えていた。だが、作戦発動が大本営から連合艦隊司令部に下令されたにもかかわらず、小沢艦隊は全速力で激戦地のサイパンに馳せ参じたわけでもなかった。どちらかと言えば、緩慢な航行を続けた。逸る心の乗組員はヤキモキして苛ついた。

このような艦隊行動は、ビアク島救援の「渾作戦」で分派されていた戦艦「大和」以下の第一戦隊を呼び戻し、合流させようとしたからであった。各陸上の航空部隊の投入とともに、有力な第一戦隊をビアク島方面に向かわせることによって、米機動部隊を誘い出そうとした。空振りに終わった形である。米軍はすでにマリアナ攻略作戦の決行を統合参謀本部の会議で決定しており、作戦発令下で各関係部隊は動いていた。また日本海軍の行動は暗号傍受により察知されていたので、無駄な動きであった。

第一戦隊は同16日〔16：00〕に主力部隊と無事、合流した。第一補給部隊は、小沢機動部隊麾下

の巡洋艦、駆逐艦以下の艦艇に対してうねりの高い洋上で東進しながら、燃料の曳行補給を実施し、17日〔15：30〕に作業を完了した⁹⁾。これで作戦行動の準備が整った。各部隊は前衛（第二艦隊の一部）—甲（第一航空戦隊基幹）—乙（第二航空戦隊基幹）—丙（第三航空戦隊基幹）の配列で針路60度、速力20ノットに増速して、対潜警戒の之の字運動をしながら、東方の敵を目指して進撃を開始した。後に、大林少将の指揮する丙部隊は前衛に編入された。この処置は強力な火力を有する主力艦を前程に並べて、来襲する米軍機を迎え撃つ意味がある。それと共に、敵発見の報に接すれば、大林部隊の空母機が直ちに攻撃発進できるように考えた末の指令であり、時宜を得た決定であった。

フィリピン海洋上における日本空母部隊の東進は、サンベルナルジノ海峡付近で待ち構えていた米潜水艦「フライング・フィッシュ」が発見し、15日付けの情報で、第五艦隊司令長官・スプルーアンス提督に知らされた。小沢部隊でも午後〔08：30〕に、背後の至近距離から敵潜が長文の電報を発信する様子が、通信傍受で確認された。また同日、米潜水艦「シーホース」は、スリガオ海峡沖のフィリピン海を北に向けて進む宇垣纏中将の第一戦隊に触接した。6月16日午前〔4：00〕にその情報がハワイの海軍司令部にもたらされた。水中走行3ノットからせいぜい5ノットの潜水艦が、20ノットからの速度で航行する機動艦隊を追尾し続けることは不可能である。やがて小沢艦隊を見失う。ここまでは、つまり小沢艦隊がフィリピン海に出てきた時点までは、スプルーアンス提督の知りうるどころであった。けれども、それ以後は小沢の巧みな操艦用兵戦術のために、米海軍はその所在が杳としてつかめなかった。それでも、「海軍乙事件」で「福留の機密文書」を入手していた米海軍の側としては、小沢艦隊が西方からサイパンを目指していることは、疑う余地のない事実であり、その作戦の企図は白日の下にあり、大局的な意味では随分、余裕があった。

4. 先制発見と先制攻撃のための偵察重視

小沢中将の第一機動艦隊では、6月17日早朝から次々と索敵機が放たれ、予定の索敵線コースに沿って飛行していく。 Guam島などの島々に駐機する基地航空隊からも米艦隊を求めて偵察行に飛び立った。しかし寄せられる報告に確かな情報はなかった。索敵機の偵察要員の疲労はその極に達したが、翌18日も前方第一段索敵を敢行した。小沢司令長官は、積極的に敵機動部隊の発見に努め、北東方面海域に広範囲にわたる索敵を命じた。それにはミッドウェー海戦の反省に立ち、先制攻撃の機会を得ようとする小沢司令長官の意志が強く働いていた。空母対決では、一回の戦闘で勝敗の趨勢が決まりがちなので、先制攻撃がきわめて有効である。最後の5分間より最初の5分間と言われる。

ミッドウェー海戦の場合、敵空母の所在発見が遅れたために、惨敗を喫した。それも索敵法は第一段索敵に留まり、重巡「利根」と「筑摩」の水上偵察機の発進が遅れるという不手際があった。その上、誰もが敵空母はハワイに在泊中で、まだ出てこないとの先入観を持ちながら、「遊覧の雲上偵察」を予定コースに沿って型通りに飛行した。自己慢心に陥っていたのである。実際は、日本の暗号が解読されて、用意万端整えて米軍は待ち構えていた。偵察機は米艦隊の直上を通過していたが、雲に遮られて発見が遅れた。発見後も当時の機動艦隊・南雲司令長官は、万全の態勢にないた

めに即時攻撃を逡巡した。それまで数次にわたる米艦載機の挑戦を斥けていたが、活躍をした防空戦闘機の弾薬と燃料の供給が必要だった。また完全を期した空母攻撃には、艦艇に効果的な爆撃でなくてはならない。そこで一旦、防空戦闘機を母艦に收容して弾薬と燃料を補給し、攻撃機には陸用爆弾から艦船用の兵装転換を行おうとした。こうして手間取るうちにも、敵雷撃隊と直掩戦闘機隊が来襲するが、防空零戦隊と対空砲火でことごとく撥ね除ける。日本の操艦技術の巧みさと反比例して、米海軍の雷撃技術は稚拙だった。だが、急降下爆撃の攻撃は鮮やかだった。進撃コースを迷いに迷って、遅れてやってきた急降下爆撃の一隊は、たどり着いた所で断雲の間を見下ろすと、運よく日本軍の機動部隊がいた。艦上の高角砲の防空戦闘員の視線は、つい先ほどまでの戦闘で海面付近に釘付けになっていた。零戦隊も敵機との格闘で自然に高度が下がっていた。そこに上空からの逆落としてである。完全に急降下爆撃機の奇襲を受けた格好である。250キロ爆弾が飛行甲板上で炸裂した。空母に関する限り1, 2発の直撃弾では致命的な損傷にはならないはずだが、発艦準備を終えて、飛行甲板にずらりと並べた雷爆装の空母機に炎が燃え移り、誘爆を繰り返した。手の施しようもなく、2隻の空母が沈んだ。火災に包まれた旗艦「赤城」はなかなか沈まず、最期には味方駆逐艦の魚雷で処分された。後に残存の「飛龍」も撃沈される。ここに大型空母4隻すべてが海底の藻屑となって消えた。それ以上に、歴戦の技倆確かな搭乗員が多数死んだことは、当時それほど深刻な事態とは捉えなかったが、余人に代えがたい犠牲であった。

偵察の重視ないしはその成否が、戦闘を勝利に導く早道だった。小沢長官はその反省から、惜しみなく索敵網を緻密に計画して、偵察機を飛ばした。18日午前 [5:00]、洋上はまだ明けやらぬうちに、前衛の三艦戦・大林部隊は、九七艦攻14機および第五戦隊の水上偵察機2機の計16機を前方第一段索敵に発進させた。やがて東進中の敵機や複数の不明機を発見し、また別の索敵機は帰投中の午前10時に、敵の双発飛行艇1機が西に向かうのを視認し、報告してきた。午後 [0:30] 頃に、これらの索敵機は次々と帰投したが、九七艦攻1機、零式水偵1機が未帰還となった。敵艦載機発見の報は、この付近における空母の存在を予感させるに十分であった。次いで前方第二段索敵のために、[11:00] と [11:35] に計15機が発進し、午後 [00:50] に西進中の敵中型飛行艇を発見、同じく別の偵察機1機が午後 [1:30] に敵艦載機2機の西進を認めた。しかし空母の発見には至らず、三々五々帰投した。索敵機は敵味方ともに視認し合うも、自分たちの任務を全うせんものと互いにすれ違い、敵空母の発見に努めた。なかには空中戦を演じる偵察機も出た。彼我のいずれが先に相手の空母を発見するか、必死になってその確認を競い合っていた様子が思い浮かぶ。日本の索敵機は560マイル先まで進出可能である。一方、ミッチャーの飛行機は325~330マイルの索敵範囲内でしか動けなかった。小沢は巧みにその性能の違いを意識しながら、艦隊航行を指示していた。日本側は早晩、敵発見となるだろうが、小沢長官が敵艦隊から400マイルの距離を保つ限り、米海軍の敵発見は実現性が皆無である。航続距離の長いB24爆撃機が南方の陸上基地から飛来することに対する配慮も保ちながら、航行したので、南方の米軍基地航空隊も同じく、小沢艦隊を捕捉できなかった。

日本側偵察機の「敵発見」の第一報は、午後 [02:15] に前衛部隊発進の索敵機から届いた。午後 [03:00] には、飛行艇を発見した索敵機からも米機動部隊の発見を知らせてきた。さらに午後

[03:04]にも敵発見の報告が入電した。総合的に判断すると、米機動部隊は3群であることが判明した。その位置はサイパンの西南西300カイリで、小沢艦隊からは東南東380カイリの地点にあった。だがこの日、小沢長官は攻撃を仕掛けなかった。先制発見の後の先制攻撃が、空母対決の鉄則でなかったのか。沈黙考、随分思慮を巡らしたようだが、一挙大量戦力投入を決断した。

翌19日、決戦の日を迎える。この日も払暁前から小沢司令長官は索敵機を盛んに発進させようとする。午前[03:00]に小沢は、まず前衛部隊を本隊から100カイリ前方に出し、縦深配備の陣形とした。その上で、30分後に第一段索敵に各重巡4隻から水偵16機を発進させた。そして[06:45]に至って索敵機が待望の敵艦隊を発見するも、空母の存在は不明と通信連絡してきた。時刻は相前後するが、午前[06:34]に前衛の重巡「熊野」の水偵から南南西の方向、「七イ」に大型空母1隻、戦艦4隻、その他の発見を知らせてきた。「七イ」という符号は、偵察機用の海図に記された位置情報を表示していた。[06:45]に別の索敵機が敵艦隊の発見を報じてくるも、空母の存在不明。[07:15]に七番線索敵機から「空母ヲ含ム敵部隊見ユ、空母数不明」を無電連絡してきた。先に空母艦隊発見を知らせてきた同じ「熊野」の水偵から、[07:18]には大型空母4隻を追加報告してきた。

それら発見に先立ち、午前[04:15]には第二段、第三段索敵のために各14機ずつ発進させた。やがて発見報告は、「七イ」以外にも舞い込んでくる。[09:00]にサイパン島の北西方向で発見された一群は、「三リ」という符号で呼ばれたが、第五八機動部隊の第4群であった。また[08:45]の発見電によると、「七イ」と同じくサイパン島から南南西の方向に、別の一群が、少し距離を隔てた「十五リ」の位置で航行していた。しかしながら、「十五リ」と「三リ」は発見位置を誤認しており、特に「十五リ」の目標の場合は、誤差が著しく大きかった。

連合艦隊司令部は6月11日夜には、撃墜した米搭乗員からの情報を通じてミッチャーの機動部隊が4群編成の空母15隻だということを知っていた。また基地航空隊の陸偵3機のうち1機が3群の敵機動部隊の存在を報告してきた。ミッチャーの機動部隊の全兵力は正式空母7隻、軽空母8隻、護衛空母14隻、戦艦14隻、重巡10隻、軽巡11隻、防空巡洋艦4隻、駆逐艦86隻、総勢154隻の大部隊であった。空母の隻数と艦載機の数に関して日米の戦力を比較すれば、日本海軍が9隻と430機(実働380機)、そのうち戦闘機は222機であるに対して米海軍は15隻と891機、そのうち475機の戦闘機、別枠として水上機65機を用意した。「福留の機密文書」によって日本側が何機ぐらいの飛行機を用意し、その機種比率がどうかなどあらかじめ判明していた。たえず敵の倍以上という数的優位を保って対峙してくるのが、アメリカ軍の常套手段である。今次の海戦でも見ての通りである。これに質的優位が加算されると、日本側は到底かなわないとの結論が導き出されよう。小沢長官はこの劣勢をアウト・レンジ戦法で覆そうと言うのである。「寡、よく衆に勝つ」妙案として「遠距離先制攻撃法」、別名「アウト・レンジ戦法」を考案したのは、他ならぬ小沢長官自身なのである。小沢は、世界初の機動部隊編成を構想した海軍軍人としても知られていた。その実際運用の時期は、日本海軍上層部が主力艦としての戦艦重視に依然として傾いていたために、米海軍に後れをとったが、先見の明があった小沢は、空母による航空戦の権威であった。

伝統的に日本海軍は、ロシア艦隊に圧勝した日本海海戦を模範として、米国との決戦に備えてい

た¹⁰。かつてワシントン軍縮会議で主力艦の対米英比率を3：5：5に決められた。この劣勢の比率で戦って勝利を得た海戦例は、世界中のどこにもなかった。動揺した日本海軍では、東郷元帥の「鶴の一声」で猛訓練をもって対抗することに決した。そして将来の艦隊決戦では、数の劣勢を砲撃の精度と遠距離射撃で補おうとした。当時の米国は、大西洋に面した東海岸に造船所や充実した海軍基地が集中していた。米国艦隊は大西洋と太平洋にわたってスウィング方式で行き来できるようにして、両洋で何か起これば、パナマ運河を通して馳せ参じるようになっていた。裏を返せば、米戦艦の大きさはパナマ運河の通過が可能な艦幅に制限されたということである。艦幅しだい主砲の口径もおのずから制限がかけられる。戦艦「大和」「武蔵」の主砲は米戦艦のそれを凌ぎ、その射程は米艦隊には届くが、米国側の砲撃は日本艦隊に届かない。その利点を生かして、絶えず彼我の距離を保って砲撃戦を行なえば、すなわちアウト・レンジできれば、戦闘において有利な展開に持ち込めて、敵の攻撃可能な距離の埒外に身を置きながら、一方的に攻撃することが可能となる。

小沢の戦術構想はこうした日本海軍の伝統的な艦隊構想を下敷きにして、空母対決に活かそうとしたのである。敵よりも一足先に相手の空母を発見すること、敵の届かない所から攻撃機を放つことがきわめて大事になる。「あ号作戦」における小沢の作戦計画は、次のようなものである。すなわち上述のように先制発見する、その後で米空母をアウト・レンジしておき、300～400マイル離れた地点から天山艦攻や彗星艦爆といった新機種の飛行機で先制攻撃する。そして敵空母の飛行甲板を爆撃して発着艦の機能を奪う。一撃を加えるまでは敵空母に接近しない。敵空母の発着艦を不能にしておいて、次いで飛行機隊が陸上基地航空隊と協力して、反復攻撃を加える。その後、前衛の戦艦、巡洋艦、水雷戦隊が敵に肉薄して、戦果の拡大を図り、一挙に敵を殲滅する。戦術としてきわめて理に適っていた。圧倒的に不利な状況下で、それ以外に妙案となる戦法は見当たらないので、格別に正面切って異議を唱える意見は出てこなかった。

「翔鶴」所属の戦闘機隊員・白浜芳次郎兵曹の記録するところによれば、最初に敵発見の殊勲を挙げた索敵機の1機は「翔鶴」から発進したものだとする。発見後、味方を有利に導こうとそのまま触接機となって、敵艦隊の動向を逐一報告してきた。夕闇が迫る頃に、母艦に帰投してくる。だが生憎、一面の雲に遮られて母艦の所在が分からない。連合艦隊では自分の位置を知られないように無線封止し、電波誘導や探照灯の照射も禁じていた。索敵の時間と搭載燃料から試算して、あと5分の飛行にしか耐えられないという切羽詰まった状況にあった。

「スピーカーが、『索敵機よりくわれ位置を失す』の報告があった、手あき乗組員は爆音に注意せよ』と報じて来た。搭乗員たちは飛行甲板上に四散、爆音の聞こえるのを待った。続いて、『位置知らせ』とやって来る。しかし今ここで電波を出せば、わが艦隊は敵に発見される。電波は出せないのである。『爆音よ、聞こえてくれ』『索敵機よ、雲の下に出て母艦を見つけてくれ』私たちは一心に祈るより手はなかった。後甲板の方で、爆音らしきものが聞こえると知らせた者があった。『ああ、やっと見つかった』『もう少しだ、頑張れ』私たちは夢中で声援を送る。しかし爆音は遠ざかって行く。『おーい、こっちだ、こっちだ。バックしろ。バックだ』だが私たちの心が通じなかったのか、索敵機より、『われ燃料なし、ただ今よりも自爆する。国家の安泰を祈り、今次作戦の御成功を祈る、天皇陛下万歳』の発信を最後に通信はとだえてしまった¹¹」。

身命を賭して使命を果たそうとする現場将兵の姿が彷彿と浮かんでくる。所在秘匿のために厳しい無線封止は必要である。しかし敵機の攻撃可能圏外にあるので、探照灯ぐらいは点灯してもよい。潜水艦が隙を窺っている恐れがあるが、短時間なら危険は避けられよう。

「長官は、作戦上の不利を忍んで探照灯の点灯を命じたのである。しかし探照灯をつけても、その飛行機は遂に母艦を発見できずに連絡を断ってしまった。小沢長官の泣き出しそうな顔は未だに忘れることができない¹²⁾」。

偵察搭乗員本人のたゆまぬ努力には頭が下がるが、残念ながら不運な犠牲は、非常時にはつきものである。敵の早期発見と共に、艦隊の所在暴露の防止が作戦成功に肝心な点だと判断された。索敵重視の要諦は、敵発見後に直ちに先制攻撃に向かうことであった。前衛大林隊の3航戦ではここを先途と攻撃隊が発進したのだが、小沢長官からの連絡で中止を命じた。彼は正々堂々の昼間攻撃を望んだようである。米海軍では日本の来襲を夕方と予想して空中警戒をしていた。従来、日本の索敵機が帰投すると、その2時間後には攻撃隊が現れたが、なかなか現れないので、米軍機は着艦していた。そのまま大林部隊が先制攻撃を実行していたら、敵の飛行甲板を使用不能に追い込んだ可能性が高かった。戦機を逸した格好である。スプルーアンス提督は日本機の来襲がないので、小沢は3倍の戦力に驚き、一旦は戦場離脱を決断、後で各個撃破の機会を狙うことに、作戦変更したのではないかと見なした。そうであれば、明朝はグアム基地を空襲して、そこを活用できなくしようと考えた。

5. 6月19日の戦闘—日本の攻勢

6月19日は午前1時頃から飛行機を飛行甲板に揚げて、機体整備に余念がなかった。早朝からは、待望の第一次攻撃隊を「七イ」に向けて出撃させた。前衛の大林少将の率いる3航戦（これは「第三航空戦隊」の略称である。「第一航空戦隊」「第二航空戦隊」も同様に1航戦、2航戦と呼ぶ。）は[07:25]に64機発進させた。その内訳は天山艦攻7機、爆撃戦闘機43機、零戦14機であった。圧倒的な割合で戦闘機が使用されている、と見なすのは早計である。総じて攻撃に重点を置き、攻撃機を爆弾投下まで無事に掩護する、といった配慮はあまりしなかった。攻撃一点張りの突撃精神—これが日本海軍の特徴である。戦争も2年半を経て、マリアナ沖海戦では、その欠点が是正すべく配慮したと思いきや、実はそうではなかった。むしろその傾向が、劣勢に追い込まれるにつれて加速した。この「爆撃戦闘機」というのは零戦の改造21型で、増槽を取り付けて航続距離を延ばし、250キロ爆弾を搭載した攻撃機である。母艦機は5月までシンガポールの南約60マイルにあるリング泊地で訓練に明け暮れていた。その近くにはパレンバン石油基地があって、本土のように燃料補給を気にかけることなく、思う存分猛特訓に励んでいた。天山や彗星といった新鋭機ないしはその機材は内地からの補充が続かない。それで攻撃の厚みを増やすために、零式戦闘機に爆弾の装着が可能となるように改造して、それに雷爆撃機の搭乗員を乗せた。正式の略称では「爆戦」である。「爆戦」という言い方は音の響きが良くない。それで「戦爆連合」という用語がすでに定着していて、紛らわしくなるのだが、敢えて「戦爆」と言い慣わせたと思われる。そうすると、直衛戦闘機と攻撃機の比率は、3航戦第一次攻撃隊ではおよそ3:7の割合であった。戦闘機の掩護が不十分

だと、敵艦にたどりつく前に撃墜される。こうした事態は、これまでに何度となく繰り返されていた。それが正できない。敢闘精神を現場の戦闘員に要求するだけである。日本海軍の組織は根底から教訓を汲み取り、抜本的に新機軸を打ち出せなかった。とに角、小沢部隊の発想としては、いち早く米空母の発着艦能力の封殺を目論み、飛行甲板に爆弾を投下させようとした。それならば、前日の発艦を中止せず、敢行するのが望ましかった。

引き続き、甲部隊小沢司令長官直属の1航戦128機を発進させて、同じく「七イ」の目標に向かわせた。[三リ]の目標に対しては、[08:30]に城島部隊の2航戦「隼鷹」「飛鷹」「龍鳳」から49機を攻撃に向かわせた。9隻の空母から発進したのは、計241機の大編隊であった。その全容は真珠湾攻撃の第一次攻撃隊183機をはるかにしのぐ開戦後最大の兵力であった。

第一次攻撃の1航戦飛行機隊（601空）は数少ないとはいえ、歴戦の搭乗員を諸隊の編成に組み込み、小沢艦隊のうちで最も精鋭を揃えていた。ところが、編隊の指揮官・垂井少佐は軍令部動めから実戦部隊に配属され、久々の飛行で緊張のあまり味方識別信号の発信を忘れた。また艦隊上空は飛ばないように取り決めがなされていたのを失念していた¹⁹。タウイタウイ泊での1か月間、訓練ができなかったことはすでに触れたところである。その弊害が現れたのか、高度4千メートルでそのまま攻撃隊を前衛主力部隊の方に誘導して、その上空を通過しようとした。そのために、敵と見誤った味方の対空砲火で撃墜されるといった事故が起きた。その時の気持ちを、零戦のパイロット・白浜芳次郎兵曹は次のように述べている。

『やめろ、味方機を間違えるな、射撃を止めろ！』零戦はますます大きなバンクをやり、前衛部隊に味方機を知らせるために、さかんに味方識別をやっている。重い魚雷や爆弾をいただいた艦攻撃隊、艦爆隊は大きなバンクができない。へたをやって大事な一本しかない魚雷や爆弾を落としたら大変だからだ。第二弾は攻撃隊のやや左側に破裂した。閃光は大きく開き、ついに攻撃隊をきずつけた。零戦二機、艦爆二機が、高度を下げながら旋回し後方に遠ざかっていく。『あきめくら！日本海軍の航空機がわからんのか、大事な攻撃隊をきずつけられたではないか。やめろ、やめろ！』

大きなバンクをやる零戦は機銃を撃つものもあるほど、激昂している。続いてまた上がる白煙、もう我慢がならぬ。味方でも討ち沈めるぞ。私は機上で地団駄をふんだ。しかし攻撃隊指揮官は、ゆるいバンクで右旋回をして艦隊上空通過をさせた。はるか攻撃隊の下で、ばあっと破裂した砲弾は、三十度ぐらいの角度で三百メートルくらいをつつむように、きらきらとかがやいている。ちょうど花火をみるようだ¹⁰。

「進撃方向、進撃隊形、飛行機の型などを見て判断すればわかりそうなものだ。いくら敵におびえたといっても、味方討ちをやるとは前衛部隊は何をしているのか。そのうえ大事な攻撃隊を四機も落伍させるとは何事だ。余憤おさまならない私は、前衛部隊をにらみつけた¹⁵」。

味方の射撃で2機撃墜され、破損した2機が故障で引き返す。勇躍出撃した隊員たちにとって前途多難を予感させる事故だった。情報確認の不手際、そうなったとしても深刻な事態になる前には是正できる情報システムの構築は、終戦までついにできなかった。

さらに暗い前途を予感させる事件が起きた。[08:10]頃、第一次攻撃隊の彗星艦爆1機は、空

母「大鳳」から発艦直後、右舷に敵潜水艦「アルバコア」の2本の雷跡に気づき、1本の魚雷に向かって体当たりを敢行、自爆した。残りの魚雷1本は阻止できず、右舷前方部に命中した。しかし、何ら異常が認められず、応急処置を施すと、30ノットまで速力が出て、戦闘行動に支障はなかった。さすがは新鋭の排水量3万5千トンを誇る大型空母であることを再認させた。ところが、6時間以上が過ぎた午後[02:30]になり、突如として「大鳳」は大爆発を起こし、船体が傾き出した。そして午後[04:28]に艦尾から沈んでしまった。魚雷被弾の際に、前部のエレベーターが破損して、途中で止まってしまった。甲板の高さまでエレベーターの上に木材や机を積んで、隙間を防いだ。その結果、飛行機の発着艦は可能になった半面で、換気口を封じることになってしまった。不運なことに、魚雷被弾は思わぬ箇所に来ていた。つまり重油タンクに、目につかないくらいのヒビ割れが出来ていたのである。その箇所から揮発性のガスが少量ずつ漏れていて、艦内に充満、やがて電気スパークの火花か何か引き金となって、大爆発を起こし、魚雷や砲爆弾が誘爆したのだった。同じ19日の午前[11:20]には、潜水艦「キャラバ」が6本の魚雷を放ち、空母「翔鶴」に3～4本が命中した。被雷した「翔鶴」は、大火災に包まれ、午後の[02:00]に至り沈没した。19日の戦闘で大型空母3隻のうち、2隻が米潜水艦により喪失した。いずれも、艦速を落として風上に向かい、攻撃機を発進させている時間帯であった。その時が、空母の一番脆弱な態勢にあり、そこを敵潜が狙い射ちにした。帰還してきた攻撃隊は「大鳳」と「翔鶴」の沈没を知らない。彼らは母艦の雄姿が見えないので、仕方なく別の空母に着艦せざるを得なかった。

先制攻撃に向かった大林部隊3航戦の飛行隊の状況は次の通りである。スプルーアンス提督は、前夜の作戦計画に基づいて、グアム島空襲隊および索敵攻撃隊を午前8時頃に発進させた。米機動部隊とグアムとの距離は、その南端に配した空母群とは60カイリであり、その北端に位置する空母群とも100カイリと離れていなかった。33機のヘルキャット戦闘機は、グアム基地で離陸寸前の日本機を破壊、またトラックやヤップ島からの救援機を攻撃して、30機あまりの日本機を撃墜した。あらかじめグアムの航空基地の脅威を無力化した。一方、米機動部隊は高性能レーダーを使って警戒網を張っていた。150カイリ離れた所から、3航戦と1航戦の攻撃機の接近を捕捉した。ミッチャー提督は、米機動部隊の所有するF6Fヘルキャット戦闘機450機、全部を上空に上げて、約20カイリ先の地点に防御網を張り、高高度で待機させた。その際、米軍は電波指令器を使って、戦闘機隊を日本の攻撃隊の進路上に誘導した。この指揮誘導システムが、米海軍の指揮運用法に新たに加えられて、絶大な効果を発揮した。直接肉眼で相手の所在を探し回る必要がない。3航戦の日本機編隊が現れると、[09:35]グラマンヘルキャット戦闘機が上空からいきなり襲いかかり、たちまちのうちにおよそ25機を撃墜する。大半の日本機は撃ち落された。それでも米戦闘機の邀撃と熾烈な対空砲火を潜り抜けて、戦艦「サウスダコダ」、重巡洋艦「ミネアポリス」に250キロ爆弾、各1発を命中させたが、いずれも小破だった。日本隊は途中の交戦で、敵ヘルキャット戦闘機を6機撃墜した(うち不確実1)。それに対して、日本機の被害は、総計で41機の未帰還機を出し、やっと23機が母艦に帰り着いた。米空母はいつも通り、燃料貯蔵庫の防御壁を水で満たし、パイプからはガソリンを抜いた。ヘルキャット戦闘機を放つ前後に、米機動部隊は飛行甲板を空っぽにするために、急降下爆撃機と雷撃機全機を空中に退避させた。その後、スプルーアンス提督は爆撃機に新

たな任務を与えて、グアムの滑走路に爆弾を投下させて、そこを使用不能にしようとした。日本の空母機がグアムの飛行基地を給油や爆弾装着のための中継地に活用して、往復攻撃をさせないためだった。

後続の1航戦による攻撃に際しては、米戦闘機ヘルキャット約40機が自艦隊のおよそ90キロ前方で、やはり電波指令器の誘導に従って適確に待ち構えて、[10:30] 過ぎから数時間にわたる空中戦を展開した。空母「エセックス」から発進したヘルキャット編隊が迎撃した。42機が簡単に撃ち落されていく。ブリュワー隊長は、敵は組織的防御法を知らないと報告した。技量未熟な搭乗員は練度不足を露呈し、しかも初陣の悲しさで対処法を知らなかった。日本側の今回の訓練では、そもそも敵機に対する回避の仕方は教えられていなかった。訓練に対する時間的な制約のなかでは、爆弾投下ができれば、それで良としたのである。攻撃機の発艦は、砲弾発射と同じように考えて、何発かは命中するだろうという心積りだったのか。これを意識的に行えば、フィリピン戦線での特攻隊に他ならない。襲撃を受けても、水面近くに降りて水平飛行するといった退避行動を取らず、米機から見ると、平然と同高度で編隊飛行を続けていた。海面すれすれの飛行に移れば、スピードの速すぎる戦闘機は攻撃に困難を伴う。無理強いをすると、水面に激突することになる。1航艦の攻撃隊は次から次と撃ち落され、90機を失う。「マリアナの七面鳥狩り」という言葉が、米海軍の操縦士仲間の中で誕生した。それは猟犬が七面鳥を襲うような感覚を表現していた。日本の搭乗員には、屈辱以外の何物でもないが、事実だから仕方がない。敵護衛戦闘機の迎撃網に引っかかりながらも、20機ほどが辛うじてこれを突破した。だが、巡洋艦や駆逐艦に囲まれた空母群にはほとんどとりつけなかった。その手前に展開する戦艦群からの対空砲火を浴び、VT信管の効果も手伝って撃墜が相次いだ。VT信管を装着した機銃弾は、飛行機が散布界に近づくと、命中せずとも感応して、炸裂する仕組みだった。それをレーダー照準で上空一面に撃ち上げるのである。雷撃機1機は、リー提督の旗艦「インディア」舷側に激突したが、魚雷は不発だった。わずかに数機のみが、空母群の最南端にいた空母「バンカーヒル」に近づき、2機の爆撃機が至近弾を投下し、火災を起こさせた。空母「ワスプⅡ」（初代の「ワスプ」は昭和17年9月、日本の潜水艦によって900メートルへの至近距離から6本の魚雷を打ち込まれ、撃沈させられている。）に至近弾1発の小破の被害が出る。戦艦「アラバマ」が爆弾2発の直撃を免れ、戦艦「イリノイ」、空母「エンタープライズ」「プリンストン」が近づく魚雷を回避した。それ以外で、敵空母を攻撃できた日本機はなかった。ミッチャーの運用指令に従って、各空母群は、空母が直径4マイルの中心にくるような輪形陣を組み、それぞれの任務群は12マイルの距離を隔てていた。そしてリー指揮下の戦艦部隊を、その3個空母群の前方に展開させた。日本の攻撃が前衛展開の戦艦以下の部隊に吸収される形となった。[11:10] 戦場離脱、母艦に帰投した時には、日本の攻撃機は31機に減っていた。帰還を果たした零戦2機の搭乗員は着艦後、戦死した。被害はおよそ97機、総機数の75%に及んだ。

城島少将率いる乙部隊2航戦の第一次攻撃隊49機は、他の目標に向かわせるために、しばらく飛行甲板に待機の状態だったが、他に敵発見の報を知らせてこないために、[09:00] に同じ目標の「七イ」に向けて発進した。攻撃隊のほぼ半数は戦爆機だった。その搭乗員の多くが急降下爆撃機か艦上攻撃機出身の操縦員であり、単座機での洋上飛行は初めてであった。しかも初陣の搭乗員が過

半数を占め、相当無理をして遠距離飛行した後に、新しい爆撃法で攻撃するというので、奥宮2航戦参謀は一抹の不安を感じたという¹⁹⁾。発艦後、本来なら母艦上空で編隊を組むはずだが、訓練不足のために、また雲が垂れ込めて視認不良のためにそれが叶わず、2群に分かれたままで進撃を開始した。本隊は天山7機、戦爆9機、零戦13機となり、別働隊は戦爆16機、零戦4機であった。かねて繰り出していた甲部隊第三段索敵機の1機は、南寄りの区域を索敵中、[08:45]にグアム島の南西70カイリの地点に、すなわち「十五里」に敵空母の一群を発見した。その位置は「七イ」の南南東約100カイリにあった。[09:00]には北寄りの索敵線を飛行中だった1機が、敵空母部隊を「三リ」で発見した。そこは「七イ」の北方約50カイリの地点であった。その報告を受けた小沢司令長官は[09:30]、進撃中の2航戦の攻撃隊に対して、さらに遠方の「三リ」へ攻撃目標の変更を指令した。しかし、[11:45]その地点に着き、敵を捜すが、どこにも敵の姿は見えなかった。仕方なく[11:55]に再び「七イ」を目指して進撃を開始したところで、5分後に米戦闘機40機以上の奇襲攻撃を受けて避退、戦果のないまま帰投した。被害は零戦1機(自爆)、戦爆5機および天山艦攻1機(未帰還)であった。本隊と空中集合できずに別行動を余儀なくされた別働隊は、敵空母の姿を見ることもなく、空しく[14:00]に母艦に帰還した。途中、空戦で4機撃墜したが、2航戦も自爆零戦1機、未帰還は戦爆5機、天山1機の犠牲を出した。

第一次攻撃隊は「七イ」と「三リ」の目標を指向したので、第二次攻撃隊に関しては「十五里」に向かわせることにした。第二次攻撃隊の城島部隊2航戦の艦爆隊は九九式艦爆27機、天山艦攻3機、制空零戦隊20機の計50機で[10:15]に発進した。また彗星隊(彗星9機、零戦6機の編成)は15分後に発進させた。固定脚の九九式艦爆は真珠湾攻撃の緒戦における主力機ではあったが、速度も遅く、日進月歩の戦時下にあつてはこの頃になると、もはや旧式の部類に入っていた。艦爆隊は旧式機が主体なので、彗星隊とは飛行性能に開きがあり、15分ずらして先行発進させて、攻撃に向かわせた。母艦と敵部隊との間の距離は、350カイリである。艦爆隊には、燃料の関係で無理をせず、攻撃後は母艦への帰投に及ばず、グアムに向かってよいと命じていた。九九式艦爆編隊は予定地点に敵を見ず、爆弾を海中に投棄し、再起を期してグアム基地へと機首を向けた。[15:00]グアム島上空に到着する。着陸寸前で、待ち受けていた米戦闘機約30機の襲撃に曝されて、26機喪失という損害を受けた。残存機は滑走路に着陸を試みたが、無数の爆弾孔で転倒して破損した。着陸したものの、全機使用不能に陥った。また[10:30]発進の彗星隊の場合は、彗星2機と零戦1機が故障のために引き返した。残りの12機で進撃するも、[12:40]に予定地点に至ることができたが、これまた敵影が見えず、新たに北東方向の海面に発見した敵空母に対して[13:40]に攻撃を加えるも、戦果不明、9機を失う。

小沢の本隊1航戦第二次攻撃の場合は、前路索敵用に彗星1機を[10:28]に発艦させる。それに先立つ[10:20]に天山4機、戦爆10機、零戦4機の攻撃隊を発進させた。だが、どこまで行っても敵の姿は現れず、天山3機は[15:10]に帰着、零戦隊は引き返して、そのまま上空直衛の任務に就いた。戦爆隊は途中でバラバラになり、その後の行動は不明、未帰還機は天山1機、戦爆8機となった。本隊より100カイリ前方に展開する前衛の大森部隊3航戦の場合、所属の空母「千歳」「千代田」「瑞鳳」は、帰投してくる攻撃機が真っ先にたどりつく母艦なので、飛行機の収容に追わ

れた。損傷や燃料切れで緊急着陸を要請された。空中待機の余裕がない飛行機は、駆逐艦の近くに不時着水を敢行した。そのような状況なので、攻撃機発進の機会を逸した。結局、帰着した第一次攻撃隊を再編して、計19機で第二次攻撃の準備に入ったけれども、実施することは叶わなかった。

「羽黒移乗後同艦通信能力不備ナリシ為戦況一時不明瞭トナリタルモ航空攻撃不十分ナリシ懸念、特ニ〈一五リ〉ニ対シ攻撃ヲ実施シ得ザリシコト並ニ我方残有航空兵力約100機（母艦ニ収容セル艦上機全数戦闘機44、艦爆17、艦攻30、計102機）ニ過ギザル情況ニ於テハ急速基地ニアル航空兵力ノ復帰ニ兵力ノ整理ヲ行フ要アリト認メ、取敢ヘズ西方ニ避退シ補給ノ上基地航空兵力ト呼応シ二十二日ヲ期シ再決戦ヲ行フコトニ決意シ下令セリ¹⁹⁾」

その日の夕方に第一機動艦隊「戦闘詳報」は、このように現状を分析・判断している。母艦あるいはグアム、ロタの陸上基地に帰還できたのは、127機のみで約350機が撃墜され、あるいはまた海没したのだった。19日の夜に判明した使用可能機は、わずか102機だった。第一機動艦隊小沢司令部は、炎上する「大鳳」から駆逐艦「若月」に移り、さらに[16:06]に小沢司令部は重巡「羽黒」に移乗し、「大鳳」の爆沈後も「羽黒」に将旗を掲げて作戦指揮を続行した。「羽黒」は何ぶんにも、旗艦としての通信能力が不十分なために、作戦に支障をきたした。小沢長官は情報不足も手伝って、この時点でも米機動部隊に対して相当の損害を与えたと思い込んでいた。攻撃から帰艦する機数の少なさは気になるが、グアムの陸上基地に舞い降りていると考えた。テナンやグアムなどの航空基地の航空部隊は、この日の早朝における米軍機の空襲以来、すでに機能喪失の状態になっていた。すなわち小沢艦隊と第二艦隊が合流した16日の朝には、内南洋に配備されていた1千機が急襲され、壊滅状態に陥った。連絡網も途絶していた。「あ号作戦」勝利における必須条件の一つに、母艦航空部隊と陸上航空部隊との協同作戦が挙げられていたが、それは早々とあっけなく破綻していた。小沢長官は情勢把握が不十分なため、各指揮官に戦果と損失を報告させた。味方機が100機ほどに減ったことを知ると、小沢長官は21日まで攻撃の延期を決めた。そして小沢艦隊は取り敢えず、北西方向に戦場離脱して、燃料補給やら戦闘態勢の立て直しやらを終わらせて、再度の攻撃を目指した。

6. 6月20日の戦闘—米国側の反転攻勢

米機動部隊は、19日の夕刻までに「アリアナの七面鳥狩り」から帰艦した戦闘機を収容すると、宵闇が迫ってきた。日本艦隊の来襲を阻止したと判断したスプルーアンス提督は、第五八機動部隊司令官・ミッチャー少将に対して日本艦隊への追撃を命令した。グアムとロタ島の西方海域を確保するために、空母機動群の中で1群だけは背後に残して、3個機動群は一斉に夜間を費やして追撃を試みた。

「敵が若し日本の攻撃を事前に探知し、艦隊の前方30哩に戦闘機の防禦網を張って邀撃したとすれば、それは兵術思想に於いて日本をアウトレンジしたものだ。その立派な作戦に対しては頭を下げる外ない。果たして米軍はそんな巧妙な兵法—先ず待機邀撃し、しかる後に追撃—を実施したのか？²⁰⁾」

このような疑問を投げかける伊藤正徳は、ヘルキャット戦闘機群が事前に防禦網を張って待機したわけではなかったこと、却って日本の大編隊の接近を知らされて、グアム空襲から急遽呼び戻さ

れて、その帰途に日本の攻撃隊と遭遇し、空中戦になったことを根拠に、米軍側の「アウト・レンジ戦法」を意図的に立案していなかったと主張する。その主張では、米軍側における幾分かの混乱と狼狽、行き当たりばったりの動揺を嗅ぎつけている。それはそうであろうが、アウト・レンジしたつもりの日本軍が、結果的にはアウト・レンジされていたのは紛れもない事実である。また事前の「福留の機密文書」の情報を通じて陸上基地の航空兵力を潰滅させることが、マリアナ攻略を勝利に導く秘訣であり、スプルーアンス提督は日本機来襲の直前にグアム強襲作戦を優先した。

完備された情報網を通じて臨機応変な処置を行うスプルーアンス提督の卓越した才能を見せられる思いである。この提督の抜群の才能は注目すべきであり、ミッドウエー海戦でも如何なく発揮された。すなわちあらゆる面で劣勢ななか、当初の犠牲を物ともせず、矢継ぎ早に攻撃機を繰り出し、最後に偶然のように攻撃の機会に恵まれて、日本の大型空母4隻を撃沈でき、搭乗員の精鋭を亡き者にできた。この場合の大勝利も、看過できない暗号被解読が決定的な役割を演じた。作戦発起に関する情報は、暗号解読を通じて手の内を読まれていた。日本海軍は予想外に弱かったとは、帝国陸軍の総評であるが、日本海軍は、海戦の大局的な情勢把握という観点からは、米海軍の掌中に取り込まれて最初からすでに劣勢に陥っていた。マリアナ沖海戦では、暗号被解読と併せて「福留の機密書類」の暴露が大きな意味を持った。そもそもスプルーアンスは空母機動部隊の専門家ではなくて、ミッドウエー作戦の直前に緊急入院したハルゼー提督の代わりに臨時に抜擢され、才能が開花した。ニミッツ大将の慧眼の賜物である。こうした抜擢は、硬直した官僚主義体質が海軍組織の骨の髄まで浸透した日本海軍には真似のできないところである。

それにしても、スプルーアンスが海戦の時々刻々と変化する局面に応じて思い切った行動に出る軍人魂には敬服せざるを得ない。冒険的な大胆な行動と現実対応の妙味は、ひとりスプルーアンスだけのものではなく、概して建国以来の歴史が培ったものと見てよい。欧州の身分社会でうだつの上がない人々が、しがらみのない「自由の天地」で存分に活動する米国民に養われた特有のスピリット、つまりフロンティア精神の所産でもあろう。日本人はきめ細かに複雑な作戦を立てて、慎重を期すあまり、膠着状態に陥る。緻密な日本人とは異なり、米国人はどのような場合も、チャンスと思えば思い切りよくパワーを発揮しようとする。

翻って、では、なぜスプルーアンスは、マリアナ沖で日本艦隊の所在を突き止めた時に、空母部隊を前方に繰り出して、決戦を挑まなかったのか、これは消極的な発想ではないのか。ミッチャー提督はただちに日本艦隊を攻撃するために進撃したい旨を提案した。ところが、スプルーアンスは彼の意見具申を排したのだが、なぜ守勢の作戦で日本の攻撃機を邀撃しようと決意したのか。らしからぬ決定である。当時の情勢を詳しく見てみると、スプルーアンスの考えがはっきりしてくる。以下でそれに言及してみよう。

当初、6月14日に彼は手持ちの4個機動群のうち、クラーク提督指揮下の2個機動群は硫黄島を含む火山列島および小笠原諸島の飛行場攻撃に派遣していた。攻撃目標の周辺の脅威を事前に取り除くことは、米軍の常套手段である。2日間の襲撃予定が16日の攻撃のみで呼び戻し、各艦に燃料の補給を命じた。スプルーアンスは分散していた空母群を集結させて、輪形陣を作り、安全な操艦のために各機動群の距離間隔を12～15マイルに開いて、サイパンの上陸拠点の沖合を遊弋した。昼

間は小沢艦隊を探索しながら、前方に偵察機を飛ばし西進した。だが夜間になると、サイパン方向に反転といった艦隊運動を繰り返した。日本艦隊の行方はつかめなかった。潜水艦も6月17日に「キャバラ」が一報を入れたのを最後に連絡がなかった。それまでの「キャバラ」の報告によって日本艦隊がマリアナ海域に針路を取り、進撃していることは分かっていた。18日の夜[19:30]頃、小沢艦隊は実に不用意に無線通信を使った。真珠湾の高性能方位測定所が、それを見逃さなかった。1時間足らずのうちに第五八機動部隊は「敵機動部隊は貴隊の位置から西南西355浬にあり」との通報を受けた。小沢艦隊は、位置秘匿には細心の注意を払ってきた。電波発信すると、たちまちに所在を嗅ぎ付けられると考えて、6月16日の連合艦隊司令部に宛てた最後の連絡電報を発信するために、「大鳳」から彗星艦爆をパラオのペリユリュー基地に派遣して、そこから電報を打たせた。味方補給部隊の所在不明に際しても、搜索の水上偵察機が発見の報を知らせるのに、報告球を空母の甲板に投下した。敵潜水艦に対しては眩惑させるために、日没前は北寄りのコースを取ったかと思うと、夕暮れと共に南に針路を変えた。それほどまでに用心していたのに、18日夜の通信は不用意な電波発信となった。その報に接してミッチャーは、日本艦隊への速やかな攻撃を意見具申した。だが、スプルーアンスは熟慮の上、不同意を表明して、サイパンから離れることは適当ではないと声明した。ニミッツ提督から言い渡された任務に強く拘泥したからだ。つまり主たる任務は、サイパンとテニアン、グアムを攻撃し、同地域を占領することに協力するように上陸部隊を支援することであった。その上で、副次的に日本艦隊を撃滅することにあった。

現場の搭乗員たちや飛行隊長、参謀たちは、スプルーアンスの決断に不平不満が募り、海戦の結果として小沢艦隊を逃してしまったことへの責任を、彼の誤判断に帰結させた。だが、「福留の機密文書」を通じて小沢艦隊の作戦企図を見抜いていたこともあり、攻撃機を日本艦隊に向けずに、日本機への迎撃戦に徹した。そして先ずは米攻撃隊をグアムの航空基地に振り向けたことは妥当な判断だった。戦後になって、日本側の資料と当事者の証言をまとめた戦略爆撃団の報告や軍事研究家の見解を理解するに及んで、スプルーアンスの判断が正しかったことを、誰もが認めた。小沢艦隊の搭乗員と飛行機を壊滅させて、二度と空母機動部隊の本来の行動は不可能となり、空っぽの空母を海上に浮かべていたとしても、脅威は発生しなかった。つまりは、実質的な意味で機動部隊を壊滅させてしまっていたからである。

既述のごとく米海軍は、19日の日本軍機の攻撃に反撃して、大きな痛手を与えた。スプルーアンスの懸念は日本海軍の迂回攻撃だった。すなわち正面攻撃をする一方で、一部が米海軍の側面ないしは背後に回って攻略部隊を攻撃するのではないかということであったが、その危険性も遠のいた¹⁹。言い換えれば、サイパン付近に張り付く必要がなくなった。そこで、午後3時過ぎに第五八機動部隊は、全機収容の後に日本艦隊を探して突進した。

当初、ミッチャーの機動部隊はほぼ南の方向に進んだため、見当違いの搜索となって、小沢艦隊に近づけなかったが、翌20日正午に北西方向に変針し進撃を続けると、[16:00]頃、空母「エンタープライズ」の索敵機が、ついに日本艦隊に触接した。米艦隊の西北西220カイリを西方に向かって航進中で、275カイリ離れた位置にあった。今から攻撃を仕掛けると、帰艦した時は、確実に夜間収容となる。搭乗員は夜間着艦の訓練を経験してこなかった。しかも米機の航続距離から考え

て、攻撃可能圏内ぎりぎりの目標に向かうことになる。だが、ためらうことなく出撃命令を出した。10分後には第一次攻撃隊として10隻の空母から戦闘機85機、爆撃機77機、雷撃機54機が発艦した。その後、空母は少しでも飛行距離を縮めようと、増速前進した。

この点でも、日本の対応と異なった。小沢艦隊は先制攻撃に発進させた後は、敵の触接を避けるために、一時的に反対方向に変針した。作戦全般の推移を眺めていく場合、「此の一戦」、言葉を換えると、乾坤一擲の決戦と言いながら、どこかに母艦の安泰と温存を意識して、「肉を切らせて骨を断つ」の気概と覚悟が希薄のように思える。日本海軍が兵学校教育の中で、士官候補生たちに栄光の「東郷精神」を叩き込んだつもりだったが、年齢を重ねるに伴ってエリート士官は、海軍省や軍令部勤務が多くなり、その結果、大組織の官僚体制に染まり、その実践力が弱くなっていった。

話題を元に戻すと、先の米索敵機は、その後の探索で日本艦隊の位置が報告よりも、さらに60カイリ遠方にあることが判明して、連絡してきた。ミッチャーは、第一次攻撃隊にはそのまま進撃を続けさせ、第二次攻撃は取り止めた。米海軍機による攻撃は午後 [6:30] から始まる。太陽は西の水平線に没したが、海面はまだ明るく、雲の一部は残照に映えていた。遠距離攻撃と日没攻撃が、米機搭乗員の心の焦りを助長させたのか、216機は日本艦隊の上空にバラバラに殺到した。

「300マイルを飛行した後、米国機は連携した攻撃をする時間がなく、万策はほぼ尽きた。彼らにとって幸運だったのは、小沢はまだ航空機攻撃に対応する隊形を整えていなかったことだった²⁰⁾」。

小沢艦隊は朝の [07:00] に補給部隊と合同し、[11:19] に給油船は燃料補給の作業を開始し、米機の来襲時でも、いまだ補給作業の途中だった。小沢艦隊が急速に増速すると、船脚の遅い給油船6隻の船団が、護衛の駆逐艦と共に取り残された。米機は集中攻撃を加えて、「玄洋丸」「清翔丸」の2隻を撃沈し、他の2隻も甚大な被害を受けて最終的に自沈処分をせざるを得なくなった。本来であれば、ミッチャーの戦術運用と同様に、主力の戦艦群を前衛に並べて、敵機の攻撃をそこに吸収して、防御に弱い空母に攻撃機が殺到しないように工夫をする。既述の通り、遠距離飛行で疲労困憊した日本側攻撃機は、そのミッチャーの罠に嵌まってしまった。米機動部隊と同様に小沢司令長官も、先制の攻撃機を発進する前に、栗田の戦艦群と改造型空母3隻の3航戦を前衛に出して、それを盾に後方の大型空母を守る体制を敷いていた。しかし、今や北西に後退していく陣形では、殿が前衛の位置に代わり、対空射撃で威力を発揮する戦艦群が後衛となっていた。米機襲来に備えて、急速に一齐回頭を令して、完全な陣形に戻そうとした。だが間に合わない。折悪しく各部隊が併走する態勢で敵機を迎え撃った。

各空母では飛行甲板にも簡易の機銃座を据え付けて、応戦した。空母「飛鷹」は12門の高角砲と62基の25ミリ機銃が、耳をつんざくように一齐に火蓋を切った。副長・志柿謙吉中佐は、「飛鷹」が正規の位置まであと六百メートルにせまったとき、左舷の方向に砲声を聞いた。ふりむくと、高角砲弾の炸裂した上方に、敵の大編隊を認めた²¹⁾と記す。「飛鷹」に襲いかかったアベンジャー雷撃機6機に対して、「長門」の主砲は一斉射撃で4機を撃墜した。残り2機が雷撃を試み、うち1機は「飛鷹」の25ミリ機銃で撃ち落したが、残る1機が魚雷1発を命中させた。その後、敵潜の魚雷でとどめを刺されて、「飛鷹」は [19:33] に沈没した。他にも空母「千代田」「瑞鶴」の飛行甲板

は直撃弾を受けて、「隼鷹」も直撃弾2発を食らったが、沈没はしなかった。空母「龍鳳」や戦艦「榛名」、重巡「摩耶」も同じく損害を免れなかった。1時間にわたる米機の波状攻撃は猛烈だったが、魚雷の命中がなかったことがせめてもの幸이었다。日本側は、生き残りの優秀なベテラン搭乗員が操縦する防空戦闘機15機で迎撃し、それと連携した対空射撃はよく健闘し、20機の米機を叩き落とした。低空飛行の雷撃機には、主砲の水平射撃の応戦が有効であった。

小沢艦隊は19日の戦闘で243機、20日の戦闘で80機を失い、翌朝の残存機数は艦載機35機を余すのみ、他に水上偵察機12機となった。もはや航空機動戦は不可能になった。前衛の主力艦部隊に夜戦の決行を命じたが、瀬戸内海に碇泊中の旗艦「大淀」の豊田連合艦隊司令長官は、午前 [7:45] にその中止を命じた。日本海海戦以来、連合艦隊司令長官の「指揮官先頭」が日本海軍の伝統だが、山本、古賀と相次いで戦死ないしは殉死したことが影響を及ぼしたのか、乾坤一擲の決死の作戦にも豊田長官は、内地の後方基地から指揮を執った。海軍の大組織の頂点をなす幹部が、ここでも官僚体質の弊害に陥っていた。

さて、米軍機のその後のことであるが、薄暮の追撃戦から闇夜のなか帰還してきた。ミッチャーは飛行甲板の照明や移動灯、旗竿上端灯、白熱灯などを一斉に点灯させた。警戒艦からは星弾を打ち上げ、探照灯を帰投ビーコンのように上空を煌々と照らし出した。「レキシントン」では、帰還した機が着艦待機の信号を無視して着艦し、着艦済みの6機に激突して負傷者を出した。また「バンカーヒル」に折り重なって2機が着艦して、機体を粉碎し、死傷者が何人も出た。「エンタープライズ」の艦上では戦闘機と爆撃機が奇跡的に同時着艦を成し遂げた²⁹。着艦に失敗して艦橋にぶつかったり海没したり、また燃料切れで不時着水したり、と相当の混乱状態が生まれた。このチャンスに日本側が僅かな機数でも、攻撃発進させて、帰投する米軍機の背後にまぎれて敵空母に近づけば、ある程度の戦果が見込めたかもしれない。事実、のちの特攻攻撃で帰還する米機編隊の後をつけて、レーダーを惑乱し、空母への体当たり成功することになったのである。

翌日、米機動部隊は艦艇が分散して生存者の捜索に動き回っていた。米軍の陣形は乱れ、日本艦隊は360マイル前方を20ノットの速力で本土方面に退却していたので、ミッチャーは追撃を断念してサイパン方向に反転していった。22日の午後1時過ぎに日本艦隊は沖縄の中城湾に投錨した。際どく燃料切れで海洋を漂流しそうになって、帰投した艦艇も数多く出た。この2日間の戦闘で、日本側は空母「大鳳」「翔鶴」「飛鷹」を喪失し、空母機だけで約290機、基地航空隊の140機、合わせて400機以上、700名の搭乗員を失い、1年にわたって錬成した期待の航空隊はほぼ全滅した。また参加した潜水艦21隻のうち18隻が喪失した。これに対して、米軍側は飛行機100機の喪失、艦艇の沈没はなく、その被害も僅かで済んだ。

7. マリアナ沖海戦と暴かれた機密情報

サイパン沖で空前絶後の空母対決が、日米間で展開された。結果は日本海軍の惨敗に終わった。真正面から激突すれば、米艦隊は艦艇や航空機を、小沢艦隊の2倍以上は用意したわけだから、日本艦隊を粉碎するのは当然である。だからこそ小沢長官もアウト・レンジ戦法で奇襲攻撃を仕掛けようと考えたのである。残念ながら、奇襲はならなかった。何故なら、「福留の機密文書」を読み解

いて、日本海軍の動静を予測できたからである。機動部隊の編成、参加艦艇の艦型と海上兵力、訓練中の航空部隊名とその所在地、所有機数ならびに種類、各陸上基地の航空兵力等、一切合財の情報が筒抜けになった。マリアナ沖海戦勃発前に、このウルトラ情報がアメリカの各作戦部隊の指揮官に通知済みだった。他方、日本海軍の一部上層部は、情報漏洩を疑いつつも、何ら善後策を実施しなかった。連合艦隊の参謀長の不祥事で機密書類が敵側に渡ったことが知られると、大騒ぎになって海軍の組織は持たない。組織の根底から壊れてしまうといった危機感に苛まれ、問題の早期決着を図った。すなわち組織を守るために不問に付すばかりか、何事もなかったことを装う意図で、却って捕虜になった福留以下の上級将校を栄転させる処置を決定した²⁹。もちろん、小沢艦隊内の誰一人として、敵方への情報漏洩のことは知らなかった。その状態で死力を尽くして戦った。それを教えてくれているならば、漏洩した情報を逆手にとって、敵に一泡吹かせることも「災いを転じて福となす」奇策もできただろうが、超エリートの上層部関係者には自己保身だけで、そのような気配もなかった。

「六〇一空（一航戦）ノ錬成終了（四月中旬頃）セバ同航空隊ハ菲島南ニ前進待機訓練シ 爾余ノ第一機動艦隊兵力ハ〈タウイタウイ〉又ハ〈パラオ〉ニ待機セシム²⁰」。この情報は、昭和19年3月8日の作成日付のついた「Z作戦指導腹案」の一部であり「福留の機密文書」に含まれるものである。それは戦後、千早正隆・元海軍中佐が在日米軍戦史部に勤務し、戦史作成の作業をしていた折に、戦時下における日本からの押収物の中で見つけ出したものだという。千早元中佐がその手で原文を写し取ったものは、後年に防衛研修所戦史室が創設された時に寄贈されて、今に伝わる。千早は原物を発見した時には、思わず椅子から飛び上がらんばかりに驚き、身の毛がよだつほどに慄然としたともいう²⁰。米潜が苦もなくタウイタウイ泊地を偵察に来て、小沢艦隊の集結を見張ることが可能だったのも、米軍にこうした機密情報が渡っていたからである。その後、小沢艦隊は1か月の間無為の時間を過ごしたと、5隻の駆逐艦と油槽船1隻が米潜の雷撃で沈没したことは、当拙論の78頁ですでに触れたところである。小沢艦隊はタウイタウイ泊を13日の午前10時に出発して、速力18ノットとすれば、14日昼過ぎにスリガオ着、給油時間を計算に入れても、東進して早ければDデー（サイパン上陸の日）マイナス2日の午後16度、東経140度の地点に到着するだろう。このようにしてスプルーアンス提督には冷静な計算が立った。実際には、小沢艦隊がギラマス島に立ち寄ったので、目論見通りとはいかなかった。けれども米軍側としては充分に余裕をもって対処できた。13日のギラマス島への回航から17日までの小沢艦隊の動きは潜水艦が捕捉して、位置情報をスプルーアンスのもとへ知らせてきた。18日には一時見失うが、その夜には、真珠湾の海軍基地で小沢艦隊から発せられた電波をキャッチして、所在位置が暴露された。この点も既述済みであるが、そういうわけで小沢艦隊は、奇襲というには程遠い現状にあった。

5月3日に発令された「あ号作戦計画」は、豊田新長官の決定によって「Z作戦」計画書を踏襲した。元とは言えば、それは殉職した古賀長官の立案になるものである。その「Z作戦」によれば、マリアナ方面も米軍の反攻主方面と見なしていたが、軍令部作戦課や連合艦隊司令部はサイパンへの攻撃の可能性を低く見積もっていた。唯一例外的に、連合艦隊の中島親孝・情報参謀だけは、通信解析や米軍の交信状況に基づいて、客観的にマリアナ諸島が主方面であると言い当てていた。待

機場所にタウイタウイ泊に選定したのも、そこはニューギニア北西のビアク島と西カロリン諸島の一角にあるパラオに対してほぼ等距離の位置にあったからである。ほとんどの関係者は、このように主方面としてパラオ海域への侵攻か、あるいはニューギニア北岸沿いからフィリピン南部への攻勢か、いずれかを想定していた（大本営軍令部指令第三七三号）。確かにマッカーサー將軍の率いる米豪軍が活発な攻勢をかけていた。そして米軍が戦略の要衝ビアク島に上陸してくると、大本営は航空基地用の適地が多いビアクの重要性を、改めて認識した。急に慌て出し、ますますその方面にのめり込んだ。中部太平洋方面に配備していた基地航空隊の約480機を急遽ハルマヘラ方面に転用して、ビアク島反撃に備えようとした。そのために中部太平洋の空域はガラ空きとなった。最悪なことに、彼ら搭乗員は大半が移動先でマラリアやデング熱に罹患し、19日のマリアナ沖海戦には参戦できず、遊兵となった。

サイパン上陸直前6月11, 12, 13日の連続3日間の空襲によって、日本の61航空戦隊124機は撃破され、ほぼ全滅状態に陥った。第六二航空艦隊はビアク奪還の「渾」作戦で400機以上を失った。かくて内南洋の基地航空隊は各個撃破されたのである。ニミッツ提督は、マッカーサー軍のビアク攻略を巧みに利用した様子が見えがえる。日本軍がビアク方面に関心を集中している間に、あるいはそう仕向けている間にスプルーアンスの第五艦隊は肅々とマリアナ諸島に近づき、航空基地を叩いた。日本側から見れば、陽動作戦に裏をかかれたような心境であろう。だが、11日のサイパン空襲から3日経過しても、大本営軍令部は連合艦隊の「あ号作戦計画」発動要請に同意せず、徒に好機を逸した。作戦発起の遅れから、小沢艦隊と基地航空隊との組織的な共同作戦は間を置かず破綻し、構想崩れとなった。

小沢艦隊の索敵機は「七イ」を皮切りに「十五リ」「三リ」の敵空母機動群を発見し、報告してきた。それに対応して攻撃隊をその3か所に向けて順次送り出したが、攻撃隊は「七イ」を除いて発見に至らなかった。それもそのはずである。3群はほぼ同じ位置で散開していたのであり、「十五リ」と「三リ」は幻の目標だったのである。なぜそのような大事な位置情報に、齟齬が生じたのかと言えば、そこにもタウイタウイ泊での待機問題が絡んでいた。当時、飛行機の位置情報を得るためには、磁気羅針儀の狂いを定期的に修正しておく必要があった。そうでなければ、空中航法における正確さを期すことはできない。タウイタウイ泊での1か月間の缶詰状態は、搭乗員にとってもまさに「缶詰状態」であり、快適な休息どころではなかった。赤道近くの猛暑に現地人ですら午睡をとるほどの気候に身を委ねることを意味する。さらに期間中は、臨戦状態の6時間待機の連続で肉体の酷使に他ならなかった。激戦中のビアクか、それともパラオ海域か、敵機動部隊が出現すれば、直ちに小沢艦隊の出動となる。そういった切迫した状況に隊員たちは常に置かれていた。航空機全部とは言わないまでも、せめて指揮官機だけでも航空基地に陸揚げして、自差修正を施したいと願ったが、最後までその機会に恵まれなかった²⁹。タウイタウイ出港、ハルマヘラ島到着、燃料補給、サンバルナルジノ海峡の通過、それを経て、新たに米機動部隊が姿を現したマリアナ海域への到着、と目まぐるしく事態が動いたからである。ここでも情報不足による不手際ないしは判断ミスが尾を引いていた。

グアム基地の偵察機は正確に、敵機動部隊の3群がほぼ同位置に集結している、つまり機動群が

一塊に結集しているのを認め、無電の不具合からグアムの基地に戻って、そこから打電した。小沢長官は基地航空隊への信頼がいまひとつだったので、これを採り上げず、母艦索敵機の報告を信じたのだった。

次に長期のタウイタウイ泊地待機が及ぼした物理的な悪影響の一例だが、挙げておきたい。熟練の搭乗員・白浜兵曹の零戦がヘルキャット戦闘機との空中戦に入ると、機銃を発射すると、間もなく弾が出なくなる。冷や汗をかきながら、緊急にその場を離れて母艦に帰り着く。調べてみると、長い間機体の弾倉に射撃弾を詰めたまままにして置いたので、湿って弾丸が、途中で出なくなったことが分かった。このような所にも「あ号作戦計画」発動の逡巡、立ち上がりの遅さが、悪影響を投げかけていた。

米国太平洋艦隊司令長官・ニミッツ大將は、「もし、日本側が米国側の企図をあらかじめ看破して、米軍到着以前に発見されずにマリアナに空母艦隊を集結させたとすれば、状況はまったくミッドウェーと瓜二つであったわけだ²⁷⁾」と証言するが、上で見てきた通り、その仮説は絶対にあり得ない。ミッドウェー作戦の裏返しを演じるためには「福留の機密文書」漏洩事件の善後策を考えなくてはならない。そして情報戦を強化し、超エリートを自他共に認める作戦課の秀才参謀たちが、日頃から何かと軽視されている中島情報参謀の見解によく耳を傾けることである。中島は長期にわたって米海軍の通信傍受の成果を積み重ねて、暗号解読はできなかったものの、ある程度の動向が判明する域まで到達していた。残念ながら、そういった発想が日本海軍には欠けていた。「福留の機密文書」の情報漏洩事件ならびにその処理の仕方は、そのことを如実に物語っている。海軍は敵に対する情報の甘さに反比例するように、国民に対しては嘘の大本営発表を行い、マリアナ沖海戦の惨敗を、日本の勝利のように宣伝したこと、つまり他方で情報管理に注意を払ったことにも注目すべきである。情報管理は、内向きに厳しく、海の外には甘い。この態勢は現代日本国の官僚制度や政治家、企業人の体質にも言えることである。

8. むすび

ワシントン軍縮条約の時、日本の外交電報が解読されて、最初から外交的敗北が決まっていた。昭和16年の開戦前の在ワシントンの日本大使館に入電してくる電信は、隣のビルにある米国の諜報部内に備えられた解読機で盗聴されていた。日本大使館員が暗号電報を一つ一つ暗号書と突き合わせながら、手作業で解読を進めた。米国側はそれよりもいち早く、初期コンピュータ機器を使って迅速に情報内容を把握した。それで、米政府は日本大使館員が知る前に、宣戦布告を認識していた。ルーズベルト大統領は真珠湾の太平洋艦隊に警戒を発令していたが、現地では日本領マーシャル諸島から攻撃してくると思い込んでいた。現実には冬の荒波について北方から日本軍は攻撃した。日本の大使が真珠湾攻撃の30分後に宣戦布告の文書を手渡そうとしたというので、その騙し討ちに米国民は、それまでのモンロー主義的な厭戦気分から転じて、一気に戦意高揚に傾いた。山本長官の戦略は緒戦の圧倒的な勝利によって米国民の士気を挫くことにあったが、完全に裏目に出た。

他の例でも戦時下の日本軍は、輸送船に対して1日1回位置情報を報告させていた。ハワイの米海軍諜報班はその通信を解読し、近辺の潜水艦に通知した。太平洋の広大な海原でそうたやすく船

団を視認できるわけではない。不可思議な気分のまま日本側は、輸送船の甚大な被害に嘆息するばかりだった。だが、暗号被解読の事実には思い至らない。また別の例では、米潜が日本の大型艦を撃沈して、意気揚々とハワイの母港に帰投して報告したところ、暗号解読を通じた日本側の情報としてまだ撃沈に至っていないことを、潜水艦隊司令部で聞かされて、艦長は落胆したという。日本人としては笑えない話である。あるいはまた米軍の激しい本土空襲では、造船場は無傷のまま放置した。というのも、新造船に人員や軍需物資、武器弾薬の類を積み込んで、外洋に出たところを、潜水艦で雷撃したからである。そのほうが効率の点で良かったからである。比島—台湾間に横たわるバシー海峡は、日本の輸送船の墓場と化した。それでも、軍は性懲りもなく、南方に輸送船を送り続けた。超エリートの負けず嫌いの陸軍参謀たちは、駄目だったか、それならこれでどうだ、と愚かな作戦を繰り返した。10隻のうち1, 2隻でも成功すればよいと開き直り、遭難で武器弾薬を失った裸の兵隊を上陸させた。彼らには戦闘する前に、飢餓との戦いが待ち受けていた。

さらに挙げれば、6月19日のマリアナ沖の日本海軍機による攻撃では、日本の偵察機が米機動部隊上空で攻撃隊に指示を送っていた。こうした連絡法は、日本海軍には従来にないやり方なので、やっと直通電話による連携攻撃が採用されたのだ。論者は従来からの「阿吽の呼吸」「以心伝心」で行う攻撃からようやく脱したのだ、と認識を新たにしていた。ところが、米空母「レキシントン」の通信室はこの電波を傍受した。それを日系2世の士官が逐一英語に翻訳して、米側の情報源として利用した。そして効果的に日本側の攻撃方向を制した。日本側の襲撃が終わると、その偵察機は西方に飛び去った。米搭乗員は射ち落とすべきだと主張したが、ミッチャー司令官は「彼はわれわれに十分良く尽くしてくれた！」として、見逃した²⁸⁾。米軍のほうが情報戦に関しては意識が高く、実績も著しいものがあり、数段日本の上手を行っていた。華々しい戦場での直接戦闘に心を砕くあまり、日本側は、それほど徹底的に情報把握されたことを終戦後まで知らなかった。その類の事例はたくさんある。

では日本は、このように情報に鈍感な時代ばかりだったのかということ、そうとばかりは言えない。日露戦争中の明石元二郎大佐の諜報工作は、欧州で大国ロシアに痛めつけられ支配されてきたポーランドやフィンランドへの画策、ロシア国内での攪乱やレーニンへの革命支援などの功績によって、大山巖率いる満州の20万の日本軍に匹敵する戦果を挙げた。明石は、ドイツの皇帝ヴィルヘルム2世にこのように言わしめる活躍を見せた。こうした国際センス豊かな傑出した人材が育った時代もあるにはあったが、明治の黎明期に育んだ土壌は、大正、昭和と時代を重ねるにつれて失われ、思考停止の丸暗記教育に墮していった。充実した学校制度でエリート教育を行うに伴って、柔軟な思考が失われていったのは不思議な現象である。

上述で、概ね情報に関して無頓着な逸話を紹介してきた。それらはいずれも過去の話であるが、実は今に続く日本的な課題でもある。島国で非国際的な生活感覚と心情としか持ち合わせていな内向きの日本人は、他者理解も「人類みな兄弟」のような思い込みと自己基準で判断しがちである。現代のグローバル化した時代は、情報の問題がますます重要となっている。その情報もいろいろな変容態がある。情報の無視はいうまでもなく、情報の論点ズラシ、本当の情報のニセものへのすり替え、誤情報の垂れ流し、仕掛けられた宣伝戦の情報、虚偽情報、誇大情報、情報統制など、実に

さまざまな情報が飛び交っている。国家間の争いや外交に情報戦が仕掛けられるのは常識である。民主主義国の国民としては、マスコミの流す情報を単純素朴に信じ込まないことである。幸いにもインターネットが発達し始めて、情報は大手の権威主義的新闻、プロパガンダ機関の専有物ではなくなってきた。各自が自覚的に雑多な情報の間から本当の情報を選び出す能力を身につけることである。

(みやけ・みつかず つくば国際大学非常勤講師)

西部および中部太平洋の関連要地略図



- A：リング泊地（シンガポールの南東）
- B：タウイタウイ泊地（ボルネオ島の北東端）
- C：ギラマス島（パナイ島とネグロス島の中間地点）
- D：サンベルナルジノ海峡（ルソン島とサマル島との間にある海峡）
- 米第五八機動部隊の航路
- 小沢艦隊の航路

注

- 1) 拙論，2010年，「『海軍甲事件』－太平洋戦争下における情報戦」，[所収『常磐短期大学研究紀要』第38号]，そしてまた拙論，平成23年～26年，「日米の情報戦－『海軍乙事件』その他」(1)～(4)，[所収『常磐短期大学研究紀要』第39号～第42号]，これら5年連続の拙論を受けた形で今回の論文が存在し，このテーマにおいて最終の締めくくりに位置づけられる。
- 2) 「海軍乙事件」の経緯に関しては，拙論，2014年，「日米の情報戦－『海軍乙事件』その他」(2)～(4)で詳細に述べているので，それらを参照のこと。
- 3) 「トラック大空襲」については，以下の拙論で論述したので参照されたい。拙論，「日米の情報戦－〈海軍乙事件〉その他」(1)，60～65頁で検討した。また「パラオ空襲」については，拙論，「日米の情報戦－〈海軍乙事件〉その他」(2)，17～22頁で論述しておいた。

どの国の軍隊でも、一つの定石といったものがある。攻撃に直面して敵側も対応しようとする。そこをミッチャー提督のように、変更を加えれば奇襲的な効果が出る。日本海軍機が緒戦で敢行した比島空襲も、同様だった。この場合は、不可抗力的な偶然が作用した。攻撃機基地の台南方面は深い霧に包まれ、出撃時間を過ぎてでも出発できなかった。これが逆に、奇襲の効果を生んだ。真珠湾攻撃を知った比島の米陸軍機はただちに上空に舞い上がり、日本機を待ち構えた。なかなか姿を現さないの、攻撃がないと考えて着陸した。ちょうどその時、日本海軍の攻撃部隊が殺到し、米軍は完全に虚を突かれたのだった。台湾から片道500カイリの渡洋攻撃などは、当時想像すらできなかった。空襲前後には、米軍機は空母から日本機が飛び立ったと思ひ込んで、近辺の洋上を搜索し続けた。

- 4) 寺崎隆治, 1997年, 『最後の連合艦隊司令長官』, 光人社, 138~139頁。寺崎隆治は海軍大学卒業のエリート士官で, マリアナ沖海戦では連合艦隊の2航戦の先任参謀として従軍し, その後は連合艦隊参謀として小沢長官を補佐した。小沢長官のことを熟知した側近である。
- 5) 防衛庁防衛研修所, 1968年, 『戦史叢書 マリアナ沖海戦』, 朝雲新聞社, 393頁。
- 6) 晴気大佐はサイパンに満州の精鋭師団を送り込んだので, 大丈夫だと自信満々に軍議で海軍に請け負っていたが, その期待は米軍上陸と共に瞬時に砕けた。陸軍の指導部が, 米軍の実力に関していかに無知であったかがよく分かるというものである。晴気大佐は現地の参謀として赴任の予定だったが, 日本の想定よりも早くサイパン攻略戦が始まり, 硫黄島まで出かけたものの, その先のサイパンへの渡航が不可能となった。終戦直後に彼はその責任を痛切に感じて自決した。
- 7) サイパン島を含むマリアナ諸島やカロリン諸島, マーシャル諸島は戦前, 「内南洋」と呼ぶ地域だった。元はと言えば, マゼランの「発見」以来, スペインの領土だったが, 国家の財政難で, 海外膨張政策を強めるドイツ政府に売却した。グアムだけは米西戦争の結果, 米国に戦勝賠償で割譲したため, 売却対象とはならなかった。大航海時代以来, 領土化とは欧州諸国のうちで一番早く「無主地帯」に国旗を立てて, キリスト教の神に向かって宣言すれば, 自分の所有物になった。野蛮人と見なしていた現住民の意向などはまったく無視したまま, その土地は自国領土に編入された。

第一次世界大戦後に, 戦勝国の一員だった日本が, 国際連盟を通じて旧ドイツ領の委任統治を許された。グアム島は米本土—ハワイ—フィリピンを結ぶシーレーン上に位置し, 米海軍の戦略では, いざ風雲急を告げたり戦端を開いたりとなると, 太平洋艦隊がこの航路を通して緊急事態のフィリピンに駆けつけるシナリオを描いていた。日本側でも内南洋は, 対米作戦にきわめて重要な戦略的領域だと認識していたが, 日本海軍ではその必要性を認めても, ほとんど軍需施設の整備をしてこなかった。その消極的な姿勢は, 別に委任統治地域への軍事要塞化を国際連盟が禁じていたことから生じたのではなくて, 予算の都合上, 後回しにしたためであった。しかし根本的には, 海軍の戦略構想における攻撃重視に主たる原因があり, それと隣り合わせて守備力軽視を是認していたものと考えてよい。「米国大使館附武官から南洋諸島視察の申し入れがあっても, 言を構えて極力拒否して来たのは, 条約違反を摘発される虞れよりも, この重要戦略地域が, 殆んど無防備状態にあることを確認されることを恐れたからであった」(福留繁, 1951年, 『海軍の

反省』、日本共同株式会社、138～139頁)。ニミッツ提督は、トラック島が内南洋最大の軍事拠点であり、「日本の真珠湾」という別称の通り鉄壁の軍港であると思込んでいた。ところが、実際に空襲を敢行してみると、その防御がきわめて脆弱なことを知らされて、一転、内南洋に対する一気呵成の攻勢へと打って出た。

8) 淵田美津雄／奥宮正武、1992年、『機動部隊』、朝日ソノラマ、344頁。

9) 現在の自衛隊でも、航行しながらの洋上給油の技術は世界的に評価されている。米海軍は別として、どの海軍にもできる技量というわけではない。先年、インド洋で各国派遣の艦艇に給油業務を行い、海上自衛隊の貢献に関係国から高い評価と謝意を得た。民主党政権がその取り止めを決定した時には、止めずにこのまま継続して欲しいとの要望が、ドイツをはじめ欧米諸国から日本政府に寄せられた。民主党はその代償に、アフガンの警察の訓練基地をインドネシアに設けて、警察官を養成する資金を出すことにした。また日本は懲りもせず、資金手当てで済ませた。25万人の軍隊（外国では自衛隊を軍隊と信じて疑わない）を有し、世界3位の経済大国が、またヒトを出さないで金で済ませたという悪評が立ったことだろう。

目下のところ、一糸乱れずに縦横に艦隊行動ができるのは、米海軍を除けば日本の海上自衛隊だけであり、その能力は旧海軍の伝統を継いでいる。

10) 米国太平洋艦隊司令長官・ニミッツ提督は東郷元帥に接して、その魅力に心酔した。拙論、「日米の情報戦－『海軍乙事件』その他」（2）、42～43頁を参照。第五艦隊の司令長官・スプルーアンス中將も日本海軍圧勝の立役者・東郷元帥を尊敬しており、若い将校の時に大白艦隊の一員として東京湾を訪れ、歓迎会の宴席に現れた東郷元帥に尊敬のまなごしを向けた。ニミッツの状況とは異なり、文字通り彼の姿を遠目で見ただけだったが、海軍大学で東郷元帥の戦術面について研究を深めて、彼の冷静さ、忍耐強さ、戦闘のストレス状態にも堅固な意志を貫く姿勢に感銘を受け、身をもって学んだ。「この日本の提督は、当初から彼の戦闘計画をあくまでやりぬき、思慮の足りない衝動的な行動にでることはなかった」（トーマス・B・ビュエル、1975年、『提督・スプルーアンス』、小城正訳、読売新聞社、325頁）とスプルーアンスは書いた。マリアナ沖海戦での彼の持久的な待ちの姿勢は、自身の内面では東郷の日本海海戦時の心境と重なり合っていた。スプルーアンスへの影響に限らず、日本海海戦で採用した東郷の丁字戦法を一度は挑戦したいと考える将官は、太平洋戦争下の米海軍の間で大勢いた。

11) 白浜芳次郎、1985年、『最後の零戦』、朝日ソノラマ、68～69頁。

12) 生出寿、1988年、『捨身提督・小沢治三郎』、徳間書店、239～240頁。この照射措置は、白浜兵曹の記録には言及がない。彼は「翔鶴」乗艦であり、一方の証言は「大鳳」の艦橋から眺めた状況に基づくので、白浜兵曹が距離の関係で気付かなかったのか、記憶違いなのか、あるいは実際には点灯されなかったのか、その点は不明である。

13) 垂井少佐は元来、彗星隊の偵察将校である。複座機の偵察員の任務は航法と通信で多忙な仕事である。

「そもそも偵察員というのは、艦船でいうなら航海長のような責任を負わされている。その任務内容は、なんの目標もない海上を飛びながら、いつでも自分の飛んでいる地点を正確に把握してい

なければならない。その地点を航空図に記入しながら飛ぶのだ。むろん、つねに左右、後方の見張りは欠かせない。背後から迫る敵戦闘機を見落したりしようものなら、たちまち撃墜されるおそれがある。見張りとあわせ、敵と触接、または発見した場合には、ただちに本隊に無電を打って知らせる任務もある」（大野景範，1995年、『彗星爆撃隊』，朝日ソノラマ，34頁）。

「敵艦を攻撃する場合は、降下角度、高度、速力などから、照準角度を計算修正し、操縦員に伝達する。この計算をすばやく正確にやらないと、せっかく敵艦に降爆攻撃をやっても命中しないことになる。降爆まで正確にできたとしても、先にのべた航空航法の技倆が未熟だと、帰投コースに入ってから、太平洋上に浮かぶ小島の基地（または空母）にたどりつくことができない」（同上書同頁）。

以上は一般の偵察員のことである。これに加えて垂井少佐は、大編隊の指揮官としての役目がある。無線機を通して空母から数字暗号が流れてくる。特に母艦からの作戦上の緊急発信に対する聴取と索敵機からの電報傍受に全神経を集中しなければならない。その上、大編隊の指揮に関しては、垂井少佐は経験不足であり、それを補うには訓練が必要だが、訓練不足は否めなかった。

14) 白浜芳次郎，『最後の零戦』，93頁。

15) 同上書，94頁。墜落2機，破損のために引き返した味方機8機という証言もある。戦場の証言は往々にして，目撃情報が不正確で錯綜しがちである。

16) 淵田美津雄／奥宮正武，『機動部隊』，387頁。九六陸攻の搭乗員から聞いた話として「五百カイリの洋上推測航法をやれば，十五ないしは三十カイリの誤差は出るという。偵察員が搭乗する複座機においてすらこのような有様である」と，零戦における長距離航法の難しさを島川飛行兵曹長は述べている。島川正明，2011年，『島川正明空戦記録』，光人社，159頁。

17) 防衛庁防衛研修所，『戦史叢書 マリアナ沖海戦』，582頁。

18) 伊藤正徳，1956年，『連合艦隊の最後』，文藝春秋社，141頁。

19) 「分進合撃」の戦術と夜間戦闘とは，日本の陸海軍を問わず，民族気質に合うのか得意の戦法である。スプルーアンスは，戦前における日本海軍の士官たちとの対談や，開戦後に繰り広げられた日米海戦の様相から，それが日本海軍の常用するパターンだと認識していた。従って今回も，彼はその可能性を捨てきれなかった。「あ号作戦」や「Z作戦」では，殲滅戦を意図した日本海軍をモデルにしたので，小沢艦隊は全力での正面突破に出た。スプルーアンスが憂慮した日本海軍の行動は，比島作戦で日の目を見ることになる。すなわち航空戦力のない小沢空母艦隊を囮にして，ハルゼーの米機動部隊を北方に吊り上げて，その隙に栗田の戦艦群が米輸送船団を攻撃する手筈になっていた。文書通達で日本海軍の囮作戦があり得ることを知らされながらも，猪突猛進のハルゼーは，我を忘れて見事にその策に乗せられた。しかし，肝心の栗田艦隊がレイテ湾の輸送船団（マッカーサーの乗艦を含む）を目前にして，疲労困憊の状態で弱気の虫が出たのか，なぜか撤退していき，作戦は不首尾に終わった。戦後の栗田はその理由を語らないままに故人となったので，「謎の反転」の真相はわからずじまいである。

20) サミュエル・E・モリソン，2003年，『モリソンの太平洋海戦史』大谷内一夫訳，光人社，296頁。

- 21) 志柿謙吉, 2002年, 『空母〈飛鷹〉海戦記 〈飛鷹〉副長の見たマリアナ沖海戦』, 光人社, 200頁。
- 22) G・W・ニミッツ／E・B・ポッター, 1993年, 『ニミッツの太平洋海戦史』実松讓・富永謙吾共訳, 恒文社, 280～281頁。
- 23) 拙論, 「日米の情報戦—『海軍乙事件』その他」(3), 38～40頁。
- 24) W・J・ホルムズ著『太平洋暗号戦史』の巻末に「附録」として, 「機密聯合艦隊命令作第七三号」およびその別冊「Z作戦要領」が掲載されている。その他にも, きわめて重要な「Z作戦指導腹案」が載っている。本書の出典を改めて明記すれば, W・J・ホルムズ, 1980年, 『太平洋暗号戦史』妹尾作太男訳, ダイヤモンド社である。
- 25) 千早正隆, 1982年, 『日本海軍の戦略発想』, プレジデント社, 194～195頁。「Z作戦指導腹案」には, 3月10日作戦発令した時点での実際兵力や4月末日での兵力増強に関する詳細やその兵力の移動状況, 攻撃目標, 攻撃法など, 作戦構想のすべてが詳細に記載されていた。それを知った米軍はただちに, マリアナ諸島並びに周辺の日本軍航空基地を空襲した。
- 26) 淵田美津雄／奥宮正武, 『機動部隊』, 344頁。
- 27) G・W・ニミッツ／E・B・ポッター, 『ニミッツの太平洋戦史』, 263頁。米国側では情報入手やそれに基づく作戦策定などの詳細については, ほとんど言及しない。何らかの効果や意図を持っては別だけれども, 情報の問題に関してはそれこそ機密扱いの部分が多い。
- 28) 福田幸弘, 1981年, 『連合艦隊サイパン・レイテ海戦記』, 時事通信社, 62頁。

なお, 日本で「マリアナ沖海戦」と呼称されている海戦は, 米国では「フィリピン海海戦(The Battle of Philippine Sea)」と呼んでいる。実は, フィリピン海の範囲は, ルソン島とマリアナ諸島との間に広がる海域を指すばかりではなく, さらに北上して, 日本列島沿岸の海にまで及んでいる。日本では違和感があるのか, そこは「太平洋」と漠然と呼んでいるが, 国連の正式名称ではフィリピン海である。なぜそのようなことになっているかと言えば, 戦前に日本が国際連盟を脱退している間に, 国際呼称委員会でその呼び方が決定されて, 今に至っているからである。本当は日本列島の東側海域は, 「東日本海」とでも提案すべきであっただろうが, 提案する機会がなかった。ここにも国際的な孤立の時期に被った後遺症が残っているのである。

参考文献

- 千早正隆, 1990年, 『日本海軍の驕り症候群』, プレジデント社
- E・B・ポッター, 1991年, 『キル・ジャップス!—ブル・ハルゼー提督の太平洋戦史』秋山信雄訳, 光人社
- 淵田美津雄／奥宮正武, 1992年, 『機動部隊』, 朝日ソノラマ
- 福田幸弘, 1981年, 『連合艦隊サイパン・レイテ海戦記』, 時事通信社
- G・W・ニミッツ／E・B・ポッター, 1993年, 『ニミッツの太平洋海戦史』実松讓・富永謙吾訳, 恒文社
- 原勝洋, 2001年, 『暗号はこうして解読された 対日情報戦と連合艦隊』, KKベストセラーズ

- 堀栄三，1989年，『大本営参謀の情報戦記—情報なき国家の悲劇—』，文藝春秋社
- 堀川潭，1978年，『あ号作戦』，図書出版社
- 橋本以行，1988年，『伊58潜帰投せり』，朝日ソノラマ
- 井上昌巳，1987年，『テニアン空 海軍七六一空の死闘』，光人社
- ジョン・トランド，1984年，『大日本帝国の興亡』第3巻「死の島々」毎日新聞社訳，早川書房
- ジョン・ウイントン，1995年，『米国諜報文書 in the パシフィック』左近允尚敏訳，光人社
- 児島襄，1984年，『太平洋戦争』（下），中央公論社
- 中島親孝，1988年，『聯合艦隊作戦室から見た太平洋戦争』，光人社
- リチャード・オールドリッチ，2003年，『日米英「諜報機関」の太平洋戦争』会田弘継訳，光人社
- ロバート・シャーロッド／中野五郎，1995年，『太平洋戦争』下巻，光人社
- ロナルド・ルウイン，1988年，『日本の暗号を解読せよ—日米暗号戦史』，草思社
- トーマス・B・ビュエル，1997年，『提督・スプルーアンス』小城正訳，読売新聞社
- 宇垣纏，1977年，『戦藻録』，原書房
- 山川新作，1994年，『空母艦爆隊』，光人社 FN 文庫
- 山本親雄，1982年，『大本営海軍部』，朝日ソノラマ
- 山本七平，2004年，『日本はなぜ敗れるのか—敗因21か条』，角川書店
- 吉田俊雄，2000年，『マリアナ沖海戦』，PHP 研究所

A Case Study of the War of Intelligence between Japan and USA — The Battle of Philippine Sea in the Pacific War

Mitsukazu Miyake

This paper attempts to examine the process of combat between Japan and USA in the Battle of Philippine Sea, at the same time to indicate how much the so-called “Fukudome’s secret documents” help the United States Navy to win a victory. General Fukudome, captured by the troops of Philippine guerrilla, was deprived of his bag, in which top-secret documents, including the decisive information concerning war, battle operation plans, battle information, signal book and so on, were strictly kept. This information gave the United States Navy timely intelligence of Japanese intentions and actions. Consequently, this effective intelligence enabled Nimitz’ fleet to overcome Ozawa’s Tactics of Outrange. The American navy viewed intelligence as a vital component of its war effort, while the Japanese generally scorned its importance.

Keywords: Fukudome’s secret documents, A Operation Plan, Tactics of Outrange, Mariana’s Turkey Shoot, Disregard for intelligence